

---

# 真・恋姫?無双 ~ 鬼哭伝 ~

Crank

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫？無双 ～鬼哭伝～

### 【Nコード】

N8214R

### 【作者名】

Crank

### 【あらすじ】

嘗て、復讐にその身を焼いた一人の『鬼』がいた。  
『鬼』は魂を削り憎悪を成就させ、その代償として自身の命を失った。

だが、『鬼』の物語は終わらない。  
誰かが紡いだ外史。誰かが望んだ外史。誰かが夢見た外史。  
その中で、『鬼』は再び歩み始める、人として。  
そこにあるのは救済か、それとも……。

『鬼』の名は孔濤羅。コン・タオロー

今、三国志の世界を舞台に再び物語が始まる。  
手には一刀。そのみを頼りに男は遙かな乱世の時代を駆け抜ける。

## プロローグ（前書き）

この小説は、BaseSon『真・恋姫十無双』とNitro+『鬼哭街』のクロスオーバー小説です。

気が向いたらR-15くらいの描写はあるかもしれませんが、元ネタを両方知っている人はもう、18ですよ？

ただ、クロス元が元だけに残酷描写か解りませんが、首チョンパは出てくる予定です。

大丈夫な方は先に進んでください。

## プロローグ

血の海に倒れ込む二人の男。傍に立つ女が一人。

一人は既に息絶えており、もう一人の男の命も風前の灯。流れ切った血がそれを如実に語っていた。

その凄惨な状況に似合わぬ、儂く美しい少女は本当に嬉しそうに男を見下ろしている。

男も少女を真直ぐ見返すが、対照的にその表情には後悔と悲哀しか浮かんできていない。

少女の一言一言に男は涙を流す。もはや取り返しのつかぬことを悟ってなお、男は未練を捨て切れずにいた。

涙で滲む視界を既に拭う力もなく、霞消えてゆく少女の顔を男は薄れいく意識の中で少しでも少しでも長く足掻く。

奇跡よ起これと祈る。

だが、そんなものが都合良く現れるはずもない。当然だろう。男は神や奇跡を信じてなどいないのだから。

故に魂を悪魔に売り払った。嘗て自身が語ったように、人を捨て、憎悪を食らい、破滅をもたらす男は『鬼』である。『鬼』に神の寵愛などあるはずがなく、奇跡を望むだけ無駄というものだ。

視界が暗くなり、いよいよ最後の時が訪れようとしている。幸いなのは、復讐を遂げた『鬼』が人として死んでいけることだろうか。それが一体、誰にとつての救いなのかは解らない。少なくとも男にとつては違うであろう。

だが、確かにそこには救いがあったのだ。男の死は、非業でも無駄でもなく意味があり、それは何かを救う死。

もう男に少女は見えない。声も聞こえない。魂を感じる少女の気配も遠くなっていく。

受け入れられない死の前で、男は死を実感した。

そして、男は死に呑みこまれた。

男の名は孔濤羅。  
人呼んで 紫電掌。

## プロローグ（後書き）

プロローグ終了！ 短い！

まあ、のんびり書いていきますよ。

折角これ書くためにゲーム買ったんだから。

鬼哭月光・壱（前書き）

一話投稿です。



## 鬼哭月光・壱

目蓋越しに光を感じ目を覚ます。瀟羅の視界には見知らぬ天井があった。頭だけを動かして痛みで微動だにしない体を見ると、服は脱がされ全身に包帯を巻かれていた。誰かが治療をしたのが見てとれる。

訝しがりながら部屋を見ると、木製の装飾品や柱など伝統的な造りでサイバー技術が発達した現在では殆ど失われてしまった物だ。かつて過ごしたあの家を思い起こさせた。

硝子もはまっついていない窓から外を見ると、見たこともない空が瀟羅の眼を青く染め上げた。それは瀟羅をして美しいと思わせる魔都・上海の名に相応しくない空だった。大気は汚染され常にくすんでいて、そこから降る雨は毒と変わらない。

少なくとも瀟羅の知っている上海の空はそんな物だった。例え窓枠一つ分でもこんな快晴を切り取れるとは思えない。勿論、郊外に出れば汚染の影響が少ない地域もあるにはあるが、それでもここまでの空は考えられなかった。

「……………グッ！」

瞬間、口の中に鉄の味が広がった。堪え切れず布団の上に血を吐き出すと、染み一つない布団に真っ赤な海が出来上がった。

無茶の代償。度重なる電磁発頸は瀟羅の体へ負担を掛けていた。その傷を自覚すると、激痛が瀟羅を襲い、動かなかったはずの体が跳ね上がりうつ伏せになる。

「……………ッ！」

調息を行い氣息を整え全身に内気を巡らせる。体を苛む内傷の痛みが僅かにだが、徐々に治まっていった。だがそれと入れ替わりに、全身の切り傷や骨折の痛みが顔を出す。体が強張り振るえが治まらない。

見方によっては瀟羅が泣いているようにも見えた。

「おお、起きとるやん」

そんな瀧羅に突如声が掛けられた。瀧羅は視線だけを声の方に向けてると、部屋の入口に一人の女が立っていた。肩に槍を一本掛け、服の隙間より見える体は女性らしい丸みを残しながらも、その肉の下にある筋肉の存在を主張している。そのことが、この女が戦闘者であることを示唆していた。

「よっしゃ！ お前ら賈馱つち呼んで来い、これから取り調べや」

女が外に声をかけると誰から遠ざかる足音が瀧羅の耳に届いた。

瀧羅は気付かなかつたが、外に何人が居たらしい。

「あんま無理に動かん方がええで。普通やつたら死んどつた傷やつたんや。拾った命、大切にしいや」

女は瀧羅に近付きながら声を掛けた。気軽な台詞と行動に対して何かあれば持つている槍で瀧羅を突き刺すという意志がありありと感じられ、見た目に似合わない威圧感を醸し出している。勿論瀧羅がその程度のことでは委縮することはないが、意味もなく傷付いた体で暴れる気もない。大人しく、仰向けに寝直した。

「ウチは張遼、字は文遠や」

瀧羅は眉を顰める。男物の名を名乗ったことも気になるが、それ以上に名に聞き覚えがあること、字などという古い習慣を未だに使用していることに、違和感を持たざるを得ない。

「あんたは？」

「は？」

「は？ やない。こつちが名乗ったんやからそつちも名乗るのがスジつちゅーもんや。それともなにか？ ずっと、お前とか、あんたとか言われたいんか？」

「……瀧羅。孔・瀧羅」

張遼のじと目のでの言葉にある程度の納得をして、瀧羅も呟くように答えた。消えそうな程の力ない小さな声であったが、張遼はしっかりと聞き取ったらしい。先程までの冷たい表情が一変し、人懐っこい笑顔が現れる。

「孔ちゃん？ いや瀧羅。 そうやな瀧羅の方がええな。 よろしゅうな、」

「……………」

「なんや、そんな見たこともない生き物に遭遇したような顔して。失礼やん」

「あ……………すまん」

瀧羅は慌てて表情を硬くする。張遼の突然の変化や欠片も壁を感じさせない態度に呆気にとられていたようだ。そう自覚をすると余計なものまで付いてきてしまった。

全身に激痛が再び走る。

瀧羅自身は抑えたつもりだったが、その時に歪んだ表情を気取ったのか張遼が気を利かせて、すぐに声を掛けてきた。

「今からウチの軍師殿が来て取り調べや、無理はせんとゆっくりしとき」

「……………すまない」

そう言っつて瀧羅は目を閉じ、張遼の言葉に素直に従って体を休めることに専念する。視界を切ると、脳内で張遼が言った『致命傷だった』という発言が頭に引っかけた。『だった』ということは既に現在の傷は瀧羅の命を狩るに値しないと意味している。

まだ生きられる。その僅かな希望を瀧羅は大切に噛みしめた。

「礼を言わないとな」

張遼はその言葉に何でもない風に軽く答える。

「ああ、気にしなや。瀧羅の運が良かっただけや。まあ、礼を言うんやったら、うちのお願ひ聞いて欲しいんやけど」

「お願ひ？」

「そつや。うちと」

「霞！」

張遼の言葉を遮って、甲高い少女の音が部屋に飛び込んできた。

瀧羅は再び目を開いて入口に目をやると、眼鏡を掛けた三つ編みの少女が仁王立ちしているのが見えた。

「お、来たんか、賈馱。濤羅、この子が話しとつたウチの優秀な軍師殿や」

「やっと起きたのね。僕は賈馱、字は文和。あんたは？」

「……孔・濤羅」

濤羅には一切理解できないがなぜか怒り心頭の賈馱に、名を告げ、張遼へと目くばせする。張遼はその視線に申し訳なさそうな顔をすするが賈馱の怒りを宥めるそぶりは見せない。濤羅は内心嘆息して、賈馱の言葉を待った。

「じゃあ、孔濤羅。あんたは何をしにこの屋敷へ来たわけ？」

「……………何？」

予想外の言葉に阿呆の様な間の抜けた反応を濤羅は返してしまう。

「……………そっちが俺を運び込んだんじゃないのか？」

「はあ？ 何馬鹿なこと言ってるの？ なんて無関係な死にかける男をわざわざ連れ込んで治療までしてやらなきゃならないわけ？」

口調も態度も怒気を含んだ賈馱の言葉に一理あることを濤羅も理解している。だからこそ、自分が助けられた理由に思い当るところがなかった。

現在の上海は、濤羅にとって敵だらけの地なのだから。

「洛陽の様子を探りに来た間諜にしては怪しい過ぎるから一応事情を聞こうと手当てしただけなんだから」

「洛陽？ ここは上海じゃないのか？」

「はあ？ 上海ってどこよ？」

賈馱の視線がさらに鋭くなり、口調に棘が増えた。濤羅はそれに対して困惑の表情しか返せない。いかに広大な地とはいえ、中国に住む者で上海を知らないなど冗談としか思えなかった。しかし、賈馱からはそんな雰囲気を感じ取ることができない。

齟齬。

積み重なった違和感が、濤羅の中で渦を巻き、思考を阻害する。

これまで生きてきた中で培った常識という定規が歪み、あやふやになっっていく感覚。

賈馭と張遼もそんな瀧羅の状態に気付いたのか、観察するように瀧羅の顔を見るとため息をつく。

「賈馭つち、まだ頭混乱しとるようやで？」

「みたいね。まあ、無理もないけど、これじゃ尋問できないじゃないかい」

賈馭は眉根を抑えていた指を瀧羅に突きつける。

「とりあえず治療に専念しなさい。ただし！ 常に監視を付けて、許可なくこの部屋を出ることは認めないから」

「……分かった」

思わず答えた瀧羅に、フンツと鼻息荒く背を向けて賈馭は部屋から出て行った。

呆然と見送る瀧羅に張遼がため息を吐きながら話しかける。

「ああ、すまんなあ。賈馭つちもあれでええ子なんやで？」

「いや……気にしてない」

「そら良かった。なら、ウチも行くで。なんかあつたら女中なりに言いや。ウチもたまに様子見に来たる」

立ち上がる張遼。その言葉に感謝の念を抱きながら、無言で瀧羅は退室を見送った。その姿に、何か大きな違和感を覚えながら。

それから一週間は何事もなく過ぎて行った。瀧羅は一刻でも早く体を回復させようと療養に努め、賈馭も不要な接触を嫌ったのか、日に一度様子を見ては無言で帰って行った。女中達も賈馭に言い含められているのか、瀧羅とは会話もせず世話だけに専念。例外としては、張遼が瀧羅と話をしたが、やはりそれほど多く時間を取ることはなかった。張遼はどちらかと言えば瀧羅の体を気遣っての行動の様ではあったが。

だが、そんなのんびりとした時間は終わる。賈馭としても瀧羅に対する尋問を即急に行いたいところあつただろうし、瀧羅もすぐにも現状を把握して、上海に戻りたかつた。

瀧羅の脳裏には、掠れゆく意識の中で最後に見た、妹の顔が未だ

に焼き付いて離れない。なのに、あの一連の出来事が、夢、空ろのような感覚があった。

何が現実で、何が夢なのか。

今の濤羅には賈馱と話すことでしか、その答えが得られなような気がしたのだ。

だから、濤羅が目覚めてから八日目に、賈馱が張遼を引き連れて現れた時、濤羅は可能な限り歓待をした。もつとも、精々寝たきりを止め、しっかりと立って出迎える程度だったが。

そんな濤羅を見ると賈馱は、

「どうやら尋問に耐えられるぐらいの回復はしたみたいね」

と、冷たい一言だけだった。

勿論濤羅としても礼などが欲しかった訳ではない。短く、ああ、と答えると、賈馱と張遼に椅子を勧めて、自分も腰を掛けた。

「単刀直入に聞くけど、孔・濤羅、あんたは何をしに洛陽に来たわけ？」

濤羅を睨みつけながら、賈馱が詰問を始めた。強い口調と体から放たれる覇気が、場に緊張感を生み出す。いつでも濤羅に振るえるよう張遼が槍に手を掛けているのも一役買っている。

「俺は気付いたらここに居た。それまでは上海だった」

濤羅はそうはつきりと答えた。以前の問答で、この答えが信じて貰えないだろうとは思っていたが、それでも正直に自分のことを語る。嘘をつけるほど器用ではないという自覚もあった。

「だから」

「俺は……」

反論しようとする賈馱の言葉を制し、濤羅は呟くように自分のことを口にし始めた。そうすることで、胸の中のもやを取り除けるのではないかと思った。

まるで、懺悔のように。

「俺は、上海の青雲幫の凶手だった。だが、俺は仲間裏切られた。かろうじて一命は取り留めたが、組織は奴らに牛耳られていた。俺

は復讐を決意し、組織に牙を剥いて連中を殺した。『金剛六臂』『羅刹太后』『網絡蠱毒』『百綜手』。こいつらだけじゃない。こいつらを殺すために、利用した人間を殺した、阻む奴を殺した、無関係な人間を巻き込んで殺した。だが、それでも俺は剣を取った。そして、最後の一人……『鬼眼麗人』と戦ったんだ」

賈馱ははつきりと胡散臭そうな視線を瀟羅に向けてきた。それは仕方ないと瀟羅自身も分かっている。青雲幫に刃を向けるなどともな思考とは思えない。それほどに巨大な組織となっていたのだ。

だが、張遼はそうでもないらしい。目を輝かせ笑みを浮かべ、楽しげに話の続きを強請って来た。

「で、で？ その『きがんれいじん』とか言う奴との勝負はどうなったんや？ あの傷やったし、負けたんか？」

「……いや、勝った。確かに圧倒的に劣勢だったし、遊ばれていたが、俺が止めを刺した。ほとんど相討ちだったがな」

張遼の武人として強者との戦いの話への興味は瀟羅にも分かる部分があった。だから、苦笑いをしながら顛末を話す。

すると張遼はさらに興味深げに、

「は、じゃあ、どんな奴らやったんや？ 強かったんやろ、その五人？」

「そうだな……一般から見たら間違いなく強い。恐らく張遼では一人も勝てないだろう」

「はあっ？ なんや、ウチを馬鹿にしとんのか？」

瀟羅の不用意な発言で、張遼の笑顔が怒り顔に変わった。口調もきつくなっている。間違いなく、武人としての誇りを汚されたと思っただろう。

「いや、武人としての功夫を否定している訳ではないんだ」

「じゃあ、なんや！」

牙をむく張遼に瀟羅はそれでも事実を静かに告げる。人の眼は銃弾を見きれない、人の拳は音速を超えられない、人の肉体は鋼を超えられない。唯の事実であって隠すことも、ましては否定すること

もできない現実。例えそれが張遼ほどの鍛えられた肉体を持つてしてもだ。

「そんな人間居る訳ないやん」

白けた視線を隠そうともせずに張遼はため息を投げつける。

「大体、銃弾とか音速ってなんやの？ 半分くらいしか意味が分からなかったで」

「なんだと？ それは」

「はいはい、その話は終わりや。変な夢でも見たんちゃうか？ まだ回復しきってへんのやからしゃあないけど、一週間も寝続けて頭とろけてんのやろ。そろそろ体も動かし始めや」

そう言っつて張遼は席を立つ。賈馱も張遼と同様に濤羅が未だ混乱していると判断したのか後について立ち上がった。

「取り調べは中止。あんたもう少し寝てなさい」

「俺は」

「寝てる」

まだ言葉を続けようとする濤羅に対して、賈馱は冷たく強くはっきりと命令する。口を開きかけた方もその剣幕に思わずそのまま固まってしまい、言葉を続けることができなかった。



鬼哭月光・壱（後書き）

一話終了です。

ここまでエラーばっか、二時間格闘。  
疲れたあ……。

ということ、感想・批評・その他お待ちしてます。  
戦わなければ、生き残れない……。

鬼哭月光・弐（前書き）

一話パートツーです。

## 鬼哭月光・貳

月光が庭を照らす。冷たさすら感じる満月の光が夜の静寂を際立たせていた。芝の生えた庭園は時間の流れから切り取られ、一切の変化を見せない。

その止まった庭の中で瀧羅は一人佇み薄雲のかかる月を、ただじつと見上げていた。微動だにせず立ち尽くす姿、血の気の引いた顔、意志の籠らぬ濁った双眸、その全てが瀧羅を庭に置かれた彫像かなにかのように貶めていた。

瀧羅に取ってこれ程の月を見るのは初めてであった。月だけでは無い。月明かりに霞みながらも確かな存在を力強い輝きで主張する無数の星々も、それを一切遮ろうとしない澄んだ空気も、環境の汚染されきった中国では望むべくもないものだった。本来まだ動くを許されていない瀧羅ではあったが、この景色に心を惹かれ思わず庭へと出てきてしまい、呆然としながら既に一時間。それほどまでにこの光景は瀧羅にとっては美しく、異常だった。

最初に、最後に思ったのは最愛の妹のことだった。桃の花の好きだった妹がこの光景を見たらなんといったらうか。濁った硝子の様な瞳の奥に浮かぶ一人の少女は、瀧羅が全てを捧げた相手だった。肉を、魂を、命を……。

だがその妹はここには居ない。故に瀧羅はがらんどろ。その身に残る物は何だろうか。何が肉を動かしているのだろうか。治療を受けながら一週間、そのことばかり瀧羅の頭を駆け巡っていた。

けれども答えなど出るはずがなかった。抜け殻の瀧羅には今の自分が屍以上の何者にも思えず、ただ情性で肉体が生き続けているだけとはつきりと理解していた。全てが終わった後なのだ。望む形ではなかったが、裏切りと殺戮の果てに瀧羅は既に辿り着いている。その時点で瀧羅は死んだ。死者に未来は必要ない。それは絶対の摂理だ。

「……………」  
もう戻ろつか、そう考えたとき瀧羅は庭に落ちていた一本の小枝を見つけた。思わずそれを拾い上げると握り具合を確認する。握るといふよりは指先で掴むことといった程度の太さしかない二十センチばかりの枝だ。恐らく片づけ忘れたものだろうと推測する。庭にある樹はどれも手が届く高さの枝が伐採されており、掴むところが一切ない。庭師か誰かが手入れしているのだろうが、切った後にうつかり見落としてしまったのだとしたら、間の抜けた話だ。

「……………」  
静かに瀧羅は構えをとる。木の枝を剣に見立て、何十回も体に染み込ませた形をなぞる。一週間寝たきりの体は若干重さを感じさせながらも正しく動作し、瀧羅もそれをしっかりと確認する。風切り音と共に振るわれる枝の速度が徐々に上がっていく。踏み込みが強くなり、腕の振りが速くなり、体の切り替えが鋭さを増していく。最初は老人の体操の様な鈍重な動きが、今や一流の武者のそれにとどり着く。未だ治りきらぬ全身が悲鳴を上げるが一切の障害にならず、常人の目では見きれぬ速度で振るわれ続ける。

上段、中段、下段。薙ぎ、突き、掃う。種々の動きが目まぐるしく入れ替わっていく。風切り音で庭の静寂を切り裂き、瀧羅は額に汗を滲ませて一心不乱に枝を振るい続ける。

「……………」  
型が終わる。始まったときは逆に、達人から遊戯の域へと徐々に速度が落ちて行った。常人では一切見えなかったであろう枝がゆっくりと誰でも視認できるようになってくる。

そして瀧羅の動きが、完全に停止した。  
瀧羅は視線を動かすことなく問いかける。

「何か用か？」

問われた側がそれに一度びくりと体を震わせ息をのむ気配を瀧羅は感じ取った。庭で木の枝を振るい続ける自分に向けられる視線があったことは気付いていた。意識や視線を傾けることはなかったが、

内家拳を修めた濤羅にはまともな隠行も出来ていない気配をたどるなど時宜にも等しいことであつたが。

だが気付かれた方はそうでもなかつた。悪戯を見咎められた子供のように声を震えさせる。

「ご、ごめんなさい……、お邪魔をするつもりはなかつたんです。偶々通りかかつたら人影が見えたから……」

弱々しい少女の声だつた。まさに鈴が鳴るような澄んだ声音に釣られ濤羅は初めてその少女に目を向けた。寝間着であろう簡素な衣服を身に着けてはいたが、細やかな刺繍や光沢が夜目に分かるほど高級さを醸し出している。楚々とした立ち居振る舞いや愁いを帯びた瞳から濤羅の様な武骨者からもこの少女がやんごとなき身分のものだということとは想像がついた。

「いや……。もう終わつたんだ、気にしないでくれ……」

少女を脅えさせないように出来るだけ静かに声を掛けるが、生来の武骨さから濤羅自身が思う以上に堅い声色になつてしまった。怯えさせてしまつたかと思つたが、これ以上はどう気を遣つたらいいのか見当もつかない。濤羅は沈黙する他なかつた。

「あの、こちらに座りませんか？」

逆に濤羅に気を遣つたのか、少女は庭に面した廊下に腰を掛けるとそう呼びかけた。どうすればいいのか皆目見当もつかず、とりあえず濤羅は少女の言に無言で従う。

二人並んで通路に腰かけると特に何をすればいいのかも思い浮かばず、やはり無言で月を眺め始めた。月の光が明るさを増したようにな気がした。

月明かりが眩しくなり、濤羅はこっそりと視線を隣の少女に移した。穏やかな雰囲気少女は月の光に溶けていくかの様な白い肌を僅かに赤く上気させており、月光が人の形を取つた様だつた。

馬鹿なことを考えた、と濤羅は自嘲の笑みを浮かべる。それを少女は何やら誤解したようで、濤羅の表情に気付くと不安げに濤羅を見つめた。

「どうか、しましたか？」

「いや、すまん。なんでもない」

そう言って視線を月へと戻す。月に少女が重なって見えた。

また暫しの沈黙。

「綺麗な月ですね」

「ああ……」

お互い顔を見ることなく拙い会話を紡ぐ。濤羅はなぜかいつもよりも素直に心が口を突いた。

「こんな月は初めて見た……」

「そうなんですか？」

「……俺の住んでいた場所では、空は雨雲より黒い雲で覆われ、昼でも夜の様に暗かった。そこからは墨の様な毒の雨しか降らず、こっぴやう月を眺めるなんてとても……」

濤羅にはもう分かってたのだ。ここが濤羅の知るどこでもないことを。環境の汚染されつくした中国で、これほどの月を見ることなど出来るはずもない。星々が輝けるはずがない。空気が澄んでいるはずがない。草花が生きていけるはずがない。

「そんな所なんですか……」

「そんな所だ……」

ここはそんな所ではない。そんな所ではないどこかなのだ。濤羅の知らぬ地、知らぬ空。濤羅は洒落や冗談ではなく、ここが三国志の舞台、後漢末期の中華であることを少女との会話の中で自然と受け入れ始めていた。

「あの、こんな事を聞くのも変かもしれませんが……」

少女の言葉に力が込められる。月を見ていた視線が、真直ぐに濤羅に向けられた。常に気弱そうに伏し目がちだった少女からの初めての視線に、濤羅も真直ぐと向かい合い正面から受け止めた。無言で続きを促す。少女は意を決するように息を飲み込んだ。

「……帰りたくは、ありませんか？」

「……」

言葉に詰まる瀧羅に少女は真直ぐ視線を注ぎ続ける。詰問するでも強要するでもない、しかし向けられたものに嘘、偽りを許さない、そんな雰囲気醸し出していた。

故に瀧羅は視線を揺らすことしかできなかった。それは瀧羅の中で答えがでないことが結論付けられていたからに他ならないのだが、元来口下手な瀧羅は、それをどう伝えるべきなのか……。

「……未練は、ある」

ゆっくりと、一語一語を考えながら言葉を紡いでいく。少女もそれを察してただ黙って瀧羅が語り終えるのを待っていた。

「たった、一つだけだが、あそこに置いてきてしまった者が、ある……」

やはり思い浮かぶのは妹の顔だった。

しかし、その脳裏に浮かぶ妹は昔の無垢な笑顔や、見てもいない絶望の叫びを浮かべる姿ではなく、あの雨の朽ち果てた桃園での満足しきった、女の表情をした妹だった。それは瀧羅に向けられてはならぬもので、瀧羅が自身でも自覚できぬほど深い胸の奥で求めていた表情。それを最後に気付きながら手から零れ落としてしまったのだ。

「……だが、それを欲することはできない。何より俺が……許せない」

融通の利かなさは理解している。それでも瀧羅はその感情を感受することは出来なかった。それは瀧羅の兄としての人生を否定するから。瀧羅と兄弟子と妹。張りぼての幸福でも三人でいた日々は瀧羅にとってかけがえのない時間で、二人の幸福を祈ったのは間違いなく心からのものだったのだ。

「いつか、戻ることになるかもしれない……。しかし、それは……今じゃない……」

その全てを捨て、鬼となり剣を取り朋を斬り、その果ての朽ち果てる直前の自分が、妹に何を為せるといえるのだろうか？ 瀧羅はそう自問する。妹は受け入れてくれるだろう。だが、瀧羅はそれを享





だから泣いた。それは鳴き声であり、瀧羅の咆哮でもあった。

どれほど泣いただろうか。時間の感覚は感情の波に吞まれてしまっていたが、短くない間だったことは理解できた。

少女は微笑みかけるようにそこに居続けた。ずっと瀧羅を見守り続けていたのだろう。そう思うと瀧羅は急に羞恥の感情を持った。少女を直視できなくなり目を逸らす。月が眩しくなくなった気がした。

「すまなかった……」

そう謝った。

「何がです？」

「恥ずかしいところを見せてしまった」

少女は首を左右に振る。そして真直ぐに瀧羅を見つめたまま、

「そんなことはないです」

しかし少女の受け取り方はどうであれ、瀧羅がそれを恥と思っていることは変えられない。そして、同時に少女に一つの強い感情を持った。

「感謝している」

気付いたら、思ったことをそのまま口にしていた。

「何がです？」

けれど少女の返事は先程と同じ。

「……気にするな。ただ、礼がしたいだけだ」

「そんな、私は何も……」

辞退しようとする少女。しかし瀧羅としてもこのままというのはあまりにも寝覚めが悪かった。瀧羅は少女に一生恩を感じるであろうと実感している。ここで何もしなければ、それを負い目に感じ続けるとも。

だから、少々強引に話を進めた。

「とは言え、今の俺には何も無い。精々がこれぐらいのものだ」

そう手にしていた木の枝を押しつける。先程剣の代わりにしていた枝だ。少女は訳も分からずに呆然のその枝を見つめる。

「未熟な剣だが、必要になれば言ってくれ。俺の剣をお前の為に振るおう」

「え？」

少女の表情が驚愕のものへと一瞬にして変化する。この時代、武人が剣を預けるといふ正しい意味を知っているのだろう。

「でも」

「頼りないし、信用もないとは思うが……受けてもらいたい」

返そうとする少女の手を押し戻し、濤羅は静かにもう一度だけ告げた。今度はしっかりと少女の目を見据えて。少女も真直ぐに濤羅を見返した。そして、一度だけ枝に視線を移すと目を閉じる。

再び開かれたとき、そこにあるのは優しい少女のものではなく、上に立つ者の覚悟と強さを持った目が変わっていた。

「……解りました。貴方の剣、この董仲穎が受け取りましょう」

濤羅はこの少女が伝説の暴君・董卓ということに驚いたが、それを心の隅に押しやり、静かに返答をした。

「……ああ。この孔濤羅、董卓の為に剣を振るおう」

「では、私も濤羅に真名を預けましょう」

「真名？」

聞きなれない単語に疑問が浮かぶ。

「真名とは、親しい人にしか教えてはならない真の名前。その人とその人の人生そのものを表す名。妄りに唱えれば殺されても文句は言えない」

「……そんなものを俺に？」

董卓は深く頷き、元の少女の笑顔に戻ると、

「濤羅には知って貰いたくて」

その言葉に濤羅は何も言えなくなる。むしろ何を言えばいいのか解らない。董卓は信じると言っているのだ。どれほど疑われても仕方がない存在を。その気持ちに対して、濤羅の答えなど唯一つしか

ありえなかった。

「……解った」

濤羅の返事に董卓は表情を正す。

「我が名は董卓、字は仲穎、真名は……月」

「月……」

空から月が一部始終を見守っていた。



**神槍鬼剣（前書き）**

二話投稿です。

タイトルに偽りあり！

## 神槍鬼剣

「月、今の話本当なの!」

「うん、そうだよ詠ちゃん」

屋敷で最も広い部屋を埋め尽くすような賈馱の叫び声が上がった。月はそれを微風のように受け流す。

「あいつは正体不明の不審者で、しかも武器を携帯してたんだから! そんなのと主従の関係を結ぶなんてどれ程危険か!」

「きつと大丈夫だよ。濤羅さん優しい人だもの」

目や歯を飛び出さんばかりに剥きだす賈馱に、月は穏やかに微笑みかける。賈馱はそれに、うつと息を呑むが頭を激しく左右に振って緩みかけた表情を再び引き締め月に向かった。

「そんなの解らないじゃない! ねえ〜月え、目を覚ましてよ〜」  
とうとう泣きが入った。

そんな賈馱の様子を張遼はにやにやしながら見ている。小声で濤羅に耳打ちする声も明らかに堪えられた笑いが含まれていた。

「なあ、どうやって月を口説いたんや? 見かけによらず女誑しな  
んやねえ?」

「……そんなことをした覚えはないんだが」

「またまたあ、ようやるわ」

「……っ! そこ、黙ってる!」

二人の話を聞き咎めた賈馱が矛先を変えてきた。濤羅としてはそのまま月に向かってくれていれば楽だったのだが、初めて見たその時から月と賈馱の力関係は把握できてしまった。遅かれ早かれこうなったことは明らかだ。とは言え、こんな最悪な形で槍玉に挙げられるとは思わなかった。

「孔濤羅! あんた月 董卓様にいつたい何をしたの!」

「詠ちゃん、別に何もされてないよ〜」

濤羅としても月と同じことしか答えようがない。癩癩を起した相

手と冷静に話し合いが出来るとも思えないが、仮にできたとしても恐らく賈馱の望む返答は出来なかつただろう。つまりはどうあつても怒髪が天を突いている少女を宥めないといけないということだ。

濤羅は内心ため息をつく。昔から女の扱いには悪い意味で定評があつたのは知っている。自分自身でも武骨者であるという自覚があつた。こういつた場合の対処ははつきりと不得手であると断言できる。無難に首を左右に振るに止めた。

それで賈馱の視線の刃が鈍になるようなことはなかつたが……。

「まあ賈馱つち、少し落ち着きや」

突如、張遼が濤羅を賈馱の視線から庇つた。さつきまで、むしろ出会つてから今まで賈馱が濤羅を攻め立てることに對して静觀を決め込んでいた張遼が、なぜここで濤羅に味方をするような発言をし始めたのか。濤羅どころか賈馱や月も解らずに呆然とした。

「霞？」

「月本人が認めた以上、否はない。それが臣下ちゆうもんやないんか？」

「そうだけど、月に何かあつたらそれこそ何が臣下よ！」

「でも月は濤羅との主従を切る気はないみたいやで？」

「そ、そうだけど……」

賈馱が激しく言い淀んだ。濤羅と月は無言でその様子を見守るしかない。下手に何かを言えば、張遼に正論で言い負かされた賈馱の怒りを一身に受けることは火を見るより明らかだ。好んで地雷を踏む者はいやしない。

「でも、それは有能やつたららの話や」

意味深長ににやりと笑う張遼。賈馱はその表情を見て気付くことがあつたのか、はつと目を見開いて同様に厭らしい笑みを浮かべ、半眼で濤羅を視線を向けると、仰々しく口を開いた。

「孔濤羅、貴方は武官、文官、どっち？」

「……どちらと問われれば武官だ」

「ちっ」

瀧羅の返答に忌々しげに舌打ちを返す賈馱とは対照的に嬉々とした晴れやかな笑顔を張遼は見せた。この世でこれ以上楽しいことはないといった子供の様な笑顔で、手に持った槍を構える。

「なら、うちと手合わせしよー!」

「何?」

状況が呑みこめていない瀧羅に高揚する気持ちを抑えながら張遼は槍を向けたまま言葉を続ける。

「今、この武將はうち、呂布、華雄の三人や。その三人に肩を並べる言っんやから、せめてうちとまともに打ち合える力量がないといかんやろ?」

張遼の言うことも解らないではないが、それが唯の建前だ言うことは瀧羅にも理解できた。恐らく月ですら騙されることはないだろう。

「でも、瀧羅はまだ体調が優れないし……」

その証拠に、月はすぐに瀧羅を庇う発言をした。賈馱の表情が陰しくなり、眉間のしわは直視するのを遠慮したくなるほど深いものになっていた。

しかし、月の心遣いは嬉しいが、これは瀧羅にとっても好機であった。ここで実力を示すことさえできれば堂々と屋敷にいることができるのだ。さらに言えば、張遼ほどではないにせよ、心躍るのは瀧羅も同じだった。純粹に武を競う、というのは久しくなく、しかも相手が歴史に名を残す武人なのだ。これでも感じないのであればそれは既に剣士ではない。

だから瀧羅ははっきりと答えた。

月の屋敷の庭はかなり広がった。月光の下で見たときは解放感が違う。夜の闇の暗さと星の光の明るさを瀧羅は再確認したのだ。た。

庭の真ん中につっ立ってそんなことを考えていると、背後から風



切り音が届いた。振り返り音源を受け止めるはそれは一振りの剣であつた。模擬戦用に刃を潰した直刀は、重量も刃の幅も濤羅愛用の倭刀より遙かに大きい。

「すまんなあ、慣れん得物やろうけどそれ使おてや」

剣を投げたであろう張遼は、先程と違い訓練用の槍を手に持つて、悪びれもせず笑顔で話しかけてきた。もつとも、その眼の奥に宿る肉食獣のような光は隠し様もなかったが……。

「いや、構わない」

濤羅はそう答え、剣を投げ捨てた。小さく弧を描き地面に落ちた剣はその場で一回転して静止する。その様子に周囲の誰もが目を見開いて固まってしまふ。月、賈馱、その護衛の兵士、そして……張遼。

「……………なんのつもりや？」

剣と濤羅を見比べながら、張遼がいぶかしむ。対して濤羅は泰然として自然体を崩すことなく構えすら取らない。

「張遼、本気で来い」

「……………良え度胸や」

隠していた獣の笑みを浮かべ、張遼は練習用の槍を投げ捨て、常の槍を、戦場を駆け抜けた槍をその手に取り、

「うちをなめくさつて、ただで済むと思ふなや！」

強烈な殺気を放ち叫んだ。

月や賈馱は勿論、訓練を受けた護衛の兵士でさえ、その迫力に呑まれ冷や汗を流していた。正に蛇に睨まれた蛙の様な状況、しかしそこに対峙している濤羅はやはりただその場に立つのみ、むしろこの殺気を心地良いとさえ思っていた。

それは剣士としての本能に他ならない。

「行くで……………」

右手に槍を構え、腰を落とす張遼。その刃先は真直ぐに濤羅を捉えていた。

「はあっ！」

踏み込みからの突き。

半身でかわす。

張遼は槍を引きもどし、足元を薙ぐ。

右足を浮かせ透かした。

だが、張遼は持ち手を左手に切り替え、槌での突きを放つ。

濤羅は後方に飛ぶ。

瞬間、張遼も跳躍するようさらに踏み込み、右の袈裟切り。槍を回転させ威力と速度を増幅させていた。

しかし濤羅は着地と同時にもう一度後方へ。槍は服を掠めるに止まる。

張遼は返す刀で着地の瞬間の動けない左切上を狙う。

だがそれすらも空を切った。

「思った以上にやるやないか」

一度距離を取り、槍を構え直しながら張遼は笑った。自身の手足の如く華麗に振られる槍は再びその刃を濤羅に向けて輝いた。

見守る誰もが瞬きすら忘れて二人に見入る。お互いが予定調和の剣舞の様に危なげなく襲い避ける一連の流れ。それが逆に二人の実力の高さをはつきりと感じさせていた。

唯一人、孔濤羅を除いては。

濤羅の様子が変わってはいない。あれほどの怒涛の攻めにあっても構えを取らず、張遼の攻撃を涼風の様だったと言わんばかりに泰然とそこに立っていた。

「……本気で来い、時間が無いんだ」

その言葉を聞いた張遼は笑みをさらに深く刻む。視線が濤羅の体を貫き、命を刈り取る力を持った。

「……濤羅、死ぬんやないで？」

深呼吸で息を吐くと張遼の全身に力が漲っていくのを濤羅は感じていた。様々なものを削ぎ落として一本の槍と化す。

再び息を深く吸い込み……、

「これが、神速の張文遠の全力やあああああああ！」

体が霞むほど、正に神速の踏み込みからの連続の突き。一撃一撃が急所を狙う真の必殺。加速度に体重を加えた全身を使った武器ごと体を破壊せんとする意志を纏った槍。岩さえ粉碎する連撃を前に人の肉など紙に等しい。

だが、濤羅は引かなかった。

逆に歩を前に進める。

命を奪うに十分すぎる脅威に向かう。

一般人なら目視さえ困難を極める槍に濤羅は手を添える。

槍は僅かにその軌跡を変え、必殺は虚しく空を切るばかり。

流石の歴戦の勇士・張文遠も驚きを隠せなかった。

それが明らかな隙になるほどに。

刹那に満たない張遼の意識の空白で濤羅は槍の間合いを完全に埋め、相手の手首をしっかりと握った。

「あ！」

そう呟いたのは本人が観客か……。しかし濤羅には興味など欠片もなく、ただ当初の目的通りに己の力を見せるだけ。手首を通して張遼の頸の流れを変える。結果……。

それが自然であるかのごとく張遼は手首を中心に回転し庭に落ちた。大の字になって空を仰ぐその表情は、現状の認識させまともに出来ていなかった。

「……………」

濤羅は無言で掴んでいた手を離すと、その手が地面に着くのを見届けることなく背を向けて自室へと歩き始めた。この場に留まることに意味がないと。

「……………」

「……………」

「……………」

「……… ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

誰もが呆然とする中で、賈馱は逸早く正気を取り戻し、離れていく濤羅を呼び止めようと声を張り上げた。しかし濤羅は足を止める

どころか、振り返ることもなく賈馱を無視するようにその場を離れていく。

「待ってって言ってるでしょ！」

「止めえ」

再度、今度は力づくでも止めようと動き出しかけた賈馱を静止したのは、張遼だった。

「うちの、負けや」

背中越しに濤羅に届いた。濤羅も冥道に落ちたとはいえ、元は武を志した者。張遼が静かに告げた敗北宣言の重さは痛いほど伝わって来た。

だからこそ、濤羅は振り向かない。今の顔を張遼は見られたくないと思っっているのが解るから。

部屋に戻る。朝抜け出した寝台はきつちりと整えられており、他のものに一切手を触れていないので、まるで生活感の無い一室だった。まがりなりにも一週間を過ごしているはずなのだが、その気配は微塵もない。清々しいほどに無機質だった。

ゆっくりと床に腰を掛け、寝台の側面に背中を預ける。瞬間。

「…………げはっ！」

気を抜いたためか思わず咳込んでしまう。口元を覆った手にはべったりと赤い液体が付いていた。

濤羅自身も無茶をしたものだと思われ、自分に呆れる。吐血するほど内傷に響かせるつもりはなかった。ただ、本人さえも無自覚に張遼の闘気に当てられていたらしいと自覚する。張遼の面子を守りつつ、本人と周囲に解りやすく勝敗を見せつけるため、わざわざ闘いを長引かせてしまうのだから。

「ごほ…………ごほ…………」

断続的な咳の度に口の中で鉄の味が広がっていく。体もまともに動かすことができない。寝たきりより多少良好、程度の状態が今の孔濤羅なのだ。

そして近づいてくる気配に対し、まともに反応することも出来な

かった。

「濤羅！ どないしたんや！」

それは張文遠だった。すぐ後を追い掛けてきたのだろう。血を吐き座り込んだ濤羅に駆け寄ると背中を擦る。その手を濤羅は、温かく柔らかいと感じた。

「なんでそんなところに居んねん！ 早う横になり！」

「いや、いい……布団が汚れる……」

「あ 阿呆か！」

いきなり持ち上げられ荒っぽいが慎重に寝台に降ろされる。布団に血が付かないように気を付けて仰向けになると、張遼が心配と落ち込みの混ざった顔で覗き込んでいた。

「……そこまで悪かったんや？」

張遼の言葉に濤羅は、ああとだけ答えた。生きていたのが不思議な怪我なのだ。外から見える傷はそれなりに癒えてはいるが、未だ復讐の代償は重く濤羅に押し掛かっていた。

「……少しだけ、あんたの話、信じられたわ」

「……なんの話だ？」

「前に、うちじゃ勝てん奴らと鬭り合った、ちゅう話や」

表情を一変させ気持ちのいい笑顔を張遼は浮かべた。

「濤羅の言つとおりやった。少なくとも、そう信じさせられるほどにうちとあんたの間には開きがあったんや」

ホンマ完敗やわ、と張遼は笑う。濤羅は氣息を整えて真直ぐに張遼を見つめた。そこからは負の感情を全く読み取れない。正直なところ、物言いをつけて再戦を申し込むか恨みごとの一つでも言われるのかもと推測していた濤羅は思わず拍子抜けしてしまった。

「だから、さっさと体を治し。それまでにうちも腕を上げとくさかないな」

そう言って、今日一番の笑顔を張遼は作った。それは戦ったときの獣のような笑みとは違う、見惚れてしまうような笑顔だった。

張遼は部屋を出ていく。と、ひょっこりと顔だけを室内に戻

してきた。

「無理させてすまんかったなあ。最近野党紛いの奴らばっか相手にしとって欲求不満やったんや」

「いや、俺も現状を把握できた。これでどこまで無理が効くか解ったんだ。気にすることはない」

「そうか？ やったらお詫びに一つ、良えこと教えたる」  
「良いこと？」

「うちは張遼、字は文遠、真名は霞シラや。これからよろしゅうな、濤羅」

「……………ああ、こちらこそ、霞」

## 神槍鬼剣（後書き）

ということまで二話目終了です！

霞姉さんが嘔ませ？ 化してますね。ファンの方ごめんなさい！  
前書きのタイトルに偽りあり、解りました？ タイトル読んでない人もいるよねきつと。

ぶっっちゃけ剣関係ないじゃん！ 濤羅もろすぎ！

でも大丈夫です。これから自己増殖・自己修復・自己進化する細胞を取り込んでデビルタオローになります。そして三国をリングに世界の覇権を決める武闘大会が開かれるのです！

そして、そんなデビルタオロー野に放った罪で華雄は殺され、月は冷凍刑に……。

詠のこの手が光って唸る！ デビルタオローを倒せと輝き叫ぶ必殺シャアアアアアイニング・フィンガアアアアアアアアアアアア！

……勿論嘘です。

最後に、ここまで読んで下さった方に無情の感謝を。感想・批評、誤字報告等々お待ちしております。

戦雲が濤羅を呼ぶ……。

飛將軍・杏（前書き）

第二話の杏を投稿します。



## 飛將軍・巻

霞との模擬戦から数日後、濤羅は部下に指示をする霞を目撃した。話の内容から察するに、どうも遠征に出かけるらしい。

「……戦か？」

その声を掛けると霞は濤羅がいることに気付いて苦笑いを浮かべる。

「まあそついでこつちな。ついても野党の鎮圧やけどな。これだけ世が乱れとるんや。まともに生きよう思わん奴も多いんや」

「霞！」

遠くから賈馱が走って来た。一度濤羅を睨みつけると直ぐに霞に話しかける。

「準備はできたの？ そろそろ出発してくれないと困るんだけど」

「もうか、早いな」

「恋が帰って来るからね。怖いんでしょうよ」

「……違いないわ」

そう霞は溜息を吐き、賈馱も苦み走った顔をしている。濤羅はいえ、自分の歴史の知識とこの世界との齟齬に首を傾げるばかりであった。

「じゃあ、うちは行く。後頼むで」

「任せなさい」

「ああ……」

手を振りながら去っていく霞を見送ると、濤羅もその場を去ろうとする。だが、裾を握られ歩みを止められた。賈馱の手が伸びて濤羅をしっかりと捕まえている。

「なんだ？」

「なんだ？ じゃない！」

至極真つ当なはずの濤羅の問いに賈馱は怒鳴りつけて返事をした。歯を剥き出しにして敵意を全開で濤羅に放っている。

やれやれと、内心瀧羅は溜息を吐いた。月の側近である賈馱からしたらこの馬の骨とも知らない者が月の部下になったのだ。面白くないのは無理からぬことである。そう理解はしているが、瀧羅とて負の感情を無条件に向けられるのは楽しいものではない。特にそれが同志と言えなくもない間柄なら尚更だ。それが一方的な仲間意識というこのも理解はしているが。

「自分の立場解ってんの？ あんたは『明らかな敵×じゃなくって、限りなく怪しい不審者』ってだけなんだからね！」

怪しくない不審者とはどんな人間だろうと瀧羅の頭を過ったが、感情的になつた女性を相手にできるはずもない思い至り、さつさと退散することにする。

しかし、賈馱は再び裾を掴む。

「……何か用か？」

「用が無きや態々あんたなんか話しかける訳ないでしょ！」

至極真つ当なことを叫んで瀧羅を睨みつける。殺伐とした空気が（賈馱のせいで）漂う中、月がやってきて賈馱をたしなめた。

「詠ちゃん、そんなに睨んだら駄目だよ」

「もう、月はこいつに甘いんだから」

しぶしぶ眦を下げ、泣きそうな顔で月に視線を移す。瀧羅は表面には一切出さずにはっと胸を撫で下ろした。

「瀧羅、貴方に行ってもらいたい場所があるんです」

「宮中よ。そこで壺帝陛下に謁見してきなさい」

「……………俺がか？」

二人の言葉を瀧羅は信じられなかった。賈馱の言う通り、瀧羅を信用しているものなど月と霞くらいのものだ。それなのに皇帝と謁見など無謀以外の何物でもない。仮に何かあったとき、責任を取ることなど誰にもできないのだ。

「今朝、勅命の使者が来たのよ。あんたに一人で来いってね」

賈馱は不満を隠そうともせずばやいた。皇帝の命とあらば受けるしかないのだろうが、それが月の為になるとは考え難い。賈馱が消

極的になるのは無理からぬことであつたし、濤羅としても他にも思ふところはある。

「だが、霞も俺もいなくなれば、いざというときこの守りが薄くなるんじゃないか？」

将として戦うことはできないが、自分がいれば月と賈馱を逃がすことくらいは出来る自信が濤羅にはあつた。逆に言えば、腕の立つものが侵入した場合、現状では防衛に不安があるということだ。

だが、賈馱はその小さな胸を自信たつぷりに反らした。

「あんたが居なくても大丈夫よ！ もうすぐあの飛將軍・呂布が帰つて来るんだから！」

「呂布……」

先程賈馱が霞に言っていた恋という名を思い出す。恋があの人中の呂布』と呼ばれた呂奉先の事だしたら、霞が急かされて出て行ったのも納得がいった。どうも月の上司は、月が力を持ちすぎるのが面白くないらしい。濤羅はここに至ってやっと、自分の主である月の立場の微妙さに気付いたのであつた。

「ふふん。いくらあんたでも呂布には勝てないでしょ」

何故か自信満々の賈馱が胸をさらに反らし、それに対して濤羅は頭を掻く。軍師の賈馱が呂布と濤羅の実力をどう見ているのかがよく解る態度だったが、いつも掛けている眼鏡が色眼鏡になっていることは疑いようもないので濤羅は話半分に聞き流した。

「それで月、今から行けばいいのか？」

「あ、ううん。夜になつてから来てくれって。昼間は政務がお忙しいらしくて」

「精々、背中に気をつけることね」

賈馱の嫌味に濤羅は引つかかるものを感じた。

「背中？」

「ちよつと考えれば解るでしょ？ 一人だけで呼び出しなんて明らかに異じやない」

「宮中に罫が張られるのか？」

三国志では霊帝は十常侍と呼ばれる宦官と何進という大將軍の権力争いが起こっていた時代だと瀟羅は記憶していた。洛陽に常駐しているとはいえ、明らかに権力から距離を置いている董卓陣営に手を出すのは無意味に思えた。

「当たり前でしょうが。今の宮中は完全に伏魔殿になってるんだから。権力闘争の中で疑心暗鬼に凝り固まった連中が、うじゃうじゃうじゃうじゃ。はつきり言って用がなきゃ絶対に近寄りたくない場所だからね」

「そんな……瀟羅、大丈夫？」

反吐が出るとばかりの賈馱の説明に月が顔面蒼白になり不安気に瀟羅を見つめて来る。瀟羅は安心させようと月の頭を撫でると、出るだけ優しい笑顔を作った。

「大丈夫だ。俺一人ならいくらでもやり様はある。心配する必要はない」

まだいくらか懸念が残る顔をしているが、とりあえず納得して頷く。賈馱が横から「そうよ、そんな必要ないんだから！」などと辛辣なことを叫んでいるが、段々と瀟羅も慣れてきて悪意ある言葉に麻痺を起してきたようで、特に気になることもなかった。

「霊帝陛下のおなぐり〜！」

瀟羅は地に伏し待つ。嘗て青雲幫に所属していた時に覚えた作法を再び使うことになり、複雑な思いはあるが、ここで失態を犯せばそれは即座に月の責となることは明白。であるから瀟羅は最敬礼で霊帝を待っていたのだ。瀟羅の生きた時代には既に中華に帝がいなくなつて久しかったため、謁見など初めての経験で戸惑いはあつたが。

「面を上げよ」

頭上から威厳なある声が届き、瀟羅はゆっくりと頭を上げ、跪く。そこには玉座に座る一人の男がいた。一目で解る細緻な刺繍や上

質の布を纏い、様々な装飾品が男の高貴さをはつきりと証明している。

セが、濤羅はそれとは全く別の所に驚いた。

それは男の目。

生きる気力を一切失くしたかのような伽藍堂の眼が、力無く濤羅を見据えていた。三十路には届きそうもないその肉体から想像もつかないほど衰えた気配は、廃退した街の住人が放つような弱々しさだった。

薬に溺れた者、生活に疲れた者、生きること挫折した者、多くの人間を濤羅は見てきたが、これほどまでに今にも消え去りそうな男は初めてだった。

「よく来た。名を聞いておこう」

「は。孔濤羅と申します」

「ふむ。孔濤羅か……。最近洛陽に来たと聞いているが？」

「董卓殿の下で世話になっております」

靈帝の問いに濤羅は無難に答えていく。異世界から来たということとは伏せてはいたが、それ以外はありのままに返答していく。

何故か靈帝はずっと、のらりくらりと濤羅の身元話ばかり聞きたがった。正直、濤羅はその意図を測りかねていた。

「ではお主は、日常生活に難儀することはないほどに回復しておるということか……」

その時、ずっと濤羅を見下ろしていた靈帝の視線が一瞬だけ背後に向けられる。濤羅はそれでやっと靈帝の考えを理解することができた。

「はい。最近は洛陽の景色を眺め歩いたりしております」

「ほう、そうか。それは楽しそうではあるな」

「私は月見等も悪くないと思っております。特に今夜の様な月は…

…」

「そうか、今宵は良い月か……」

「如何でしょうか、これから庭先で月見など」

「悪くないの」

そう言つて靈帝は手で護衛の兵士を呼んで席を立つ。瀟羅の背後にまた別の護衛が付き、油断なく瀟羅を見張りながら歩くことを急いだ。

兵士に案内されて庭に出る。月の屋敷より広い庭には、月の屋敷と同じ月の光が注いでいた。

その中に靈帝は一人で立ち、瀟羅に視線を送る。傍まで近寄ると瀟羅は跪いた。

「よくぞ気付いてくれた。礼を言おう」

「いえ……」

「既に解つているだろうが、余は常に監視されておる。玉座では本音で喋ることも出来ぬ」

「十常侍、ですか？」

「左様。余の言動に脅えておるのよ。尤も、流石にこの庭での会話までは聞きとれんであるうがな」

「よろしいのですか？ これも宦官に疑惑を持たせるには十分だと思えますが？」

「構わぬ。それでも余は、主と話したかった」

瀟羅は再び顔を上げ靈帝を見る。そこには先程までの虚無の中に微かな愁いと希望があつた。

「夢を見たのだ」

「夢、ですか？」

首を傾げる瀟羅に靈帝は微笑んだ。現代人の瀟羅にしてみれば、夢見や占いというものは精神的な裏付けぐらいの意味しかなく、それを根拠に行動を起こすというのは納得し難いものであつた。勿論、時代背景の違いは理解しているが、瀟羅が生きてきた殺伐とした世界とは無縁だつたのだ。

「数日前にな、余の夢に高祖・劉邦様が現れたのだ。高祖様は余に『既に天命は離れた、天下は乱を迎える。その時、天より遣わされる者がある』と」

「そして、私の話を耳にされた……と？」

「うむ。余は主こそ、その『天の遣い』と思ったのだ」

まるで正解を答える子供の様に、はっきりと霊帝は告げた。しかし、濤羅はそれを素直に受けることはできない。確かに『天の遣い』と同等に奇妙な境遇の濤羅ではあるが、それ程大層な者とも思えなかったのだ。

それを霊帝は機敏に察したのだろう。濤羅が何かを言う前に手で制し、言葉をつなげた。

「安心せよ、主に漢廟の復興など求めてはおらぬ」

「では……？」

「董卓を頼みたい」

「月を？」

霊帝の要望は濤羅にとって驚愕以外の何物でもなかった。賈馱がこの場に居たら同じような反応を返しただろう。霊帝からすれば月など一臣下に過ぎないはずなのだから。

「あの子には可哀相なことをした。余に宦官を抑える力があればこのようなことにはならなかったのだが……」

「どういふことでしょうか？」

「宦官は自らの手足として、董卓の武力を用いようとしておる。そうすることで何進との権力闘争に終止符を打つつもりなのだ」

そこで霊帝は一度言葉を止め、深く深呼吸をする。濤羅も黙って、呼吸音すら霊帝の邪魔にならないよう抑えて続きを待った。

ゆっくりと霊帝は口を開く。

「董卓は否が応にもこれから権力闘争の中心に巻き込まれていくことになる。それを止めることは出来ん。だから、いざというときは、あの者を守ってやってくれ。その天の加護で」

霊帝の目は濤羅に返答を求めていた。こんなことはそれこそ『天の遣い』にしか頼めなかったのだろう。今の洛陽では権力がどのように関わっているか解ったものではない。だから、完全に第三者である『天の遣い』を頼ったのだろう、縋るように。

そして、それが気休めにしかなくなっていないことを霊帝も解っていた。キ羅ならと、信じたがっている。

そう感じ取った瀧羅の返事は決まっていた。

「私は、自らの武を董卓に預けてあります。董卓の為に剣を取ることに、どうして否を申しましょう」

はつきりと胸の奥から声を出した。霊帝はその言葉に安心したのか、ゆっくりと月を見上げる。その眼は、最初の伽藍堂に戻っていた。

「話は終わりだ、戻りたまえ」

「は。失礼いたします」

一礼して瀧羅は霊帝に背を向けその場を後にする。

「間に合って良かった……」

霊帝の言葉が、ほんの小さな呟き以下の声が、なぜかはつきりと瀧羅には届いた。

夜の洛陽は不気味雰囲気醸し出し魔都のようだった。庶人の怨嗟が漂っているような静けさを瀧羅は感じ取るのだ。だが、月明かりは煌々としており、満月こそ過ぎてているが、夜道を歩くのに難儀することはなかった。

歩きながら瀧羅は霊帝の言葉を思い返していた。

『天の遣い』……。胡散臭さは折り紙付きの肩書だ。実感は湧かないがこの時代は、そんなものでも信じて縋りたくなくなるほど腐敗の進んだ状況であることは知識として持っている。

だが、死に損ないの凶手にいったい何ができるといえるのだろうか。瀧羅にはその答えが出てこない。正しく暗中模索、切っ掛けさえないのだ。

「いや……」

そんな考えを否定する言葉が思わず瀧羅の口から零れた。

切っ掛けはある。月だ。瀧羅は月の為に剣を振るうと誓い、守る



よう依頼を受けている。ならば今できることは月の為に戦うことではないだろうか。

正しい答えかは解らないが、今の瀧羅にはそれしか思い浮かばなかった。これが智に優れた兄弟子であったなら、苦もなく正解を導きだせたのかもしれない。だが、瀧羅は目の前の事に全力を尽くすことしかできない愚直な人間なのだった。

瀧羅は自虐的な笑みを浮かべる。特段結果の変わることのない思考をいったい何度行うのだろうか。やはり自分は動く方が楽だ、と結論付けるのであった。

その時、足元から「あんあん」という犬の鳴き声がした。見下ろして見ると、小型犬が瀧羅に向かって吠えていた。呼びかけるようなその吠え声に誘われるように、瀧羅はその場に屈みこんで犬の頭を撫でてみる。すると、犬は気持ち良さそうに喉を鳴らし目を細めた。あまり動物に懐かれることのない瀧羅は驚きを感じながらも手を止めることなく目を細め、飼い主が巻いたであろう赤い襟巻の子犬を見つめる。

瞬間、子犬が歯を剥いて吠えだした。瀧羅は野生の勘に感心しながらも、子犬を抱き上げて懐に抱え込む。

同時に、夜の影から瀧羅を囲むように男達が姿を現す。手には各々武器を持っており、明らかな敵意を隠す気もない。

「孔瀧羅だな？」

一人の男が一步前に出て問いかけてきた。気配の消し方や足取りから、この男が集団の中で最も腕が立つと瀧羅は判断する。腕の中の犬は未だに吠え続けていた。

「静かにしている」

そう言っ頭を撫でると瀧羅の言葉がすっかりと解るのか、男を睨みながらも鳴くのを止めた。

それを合図に男達の殺気が膨れ上がる。子犬もそれを感じ取ったのだらう、威嚇行為が激しくなった。

「死んでもらう！」

周囲の男達が一気に包囲の輪を締め、各々の武器で襲いかかる。瀧羅はそれを紙一重で全てかわした。霞の神槍に比べれば止まっているに等しい。

相手は避けられたことに驚き動きを止めてしまう。

それは経験不足からか慢心からか。どちらにせよ未熟の一言だった。

瀧羅は身を翻す。

最初に瀧羅に声を掛けた男の眼前に瀧羅の外套の裾が迫る。

その陰から後ろ回し蹴りを瀧羅は放った。戴天流の『臥龍尾』だ。視線を裾で妨げられた男は顔面に瀧羅の踵を喰らい、鼻が潰され吹っ飛んで行った。

集団の中に動揺が走る。

その隙に瀧羅は逃走を凶った。

が。

「かはっ！」

肺から血が駆け上った。

思わず血を吐き蹲ってしまう。

体が動かなくなる。

男達は瀧羅の異変を敏感に察して、即座に反撃に移った。

指揮官を失い無闇やたらに振舞われる暴力。常なら相手にもならないが、満身創痍の瀧羅は避けることで精一杯だった。

動かぬ体に鞭を打って、僅かに反らし、動き数人の男達の攻撃をかわす。

かわし続ける。

男達が焦れ始める。瀕死の男一人に手こずることが信じられないのだろう。

だがそれは瀧羅も同じだった。今の瀧羅には反撃する力も逃亡する余力もない。

相手が素人で、指揮官もなく統率がとれていないことが幸いして攻撃を避けられているにすぎないのだ。

このまま、体力が尽きればそこで終わりだった。

濤羅は覚悟を決める。一度失った命をもう一度失うだけ。そう思うと特に苦痛は無かった。こつ体ではそもそもどこまで生きていられるのかも解らない。死が僅かに早まったただけだと考えられた。

ここまでか……。

諦観を察したのか腕の中の子犬が「わん」と吠えた。

大きくもないその鳴き声が濤羅の鼓膜を突き抜け、脳に刺さる。引きつけられるように懐を見ると真直ぐに犬が濤羅を見つめていた。濤羅はその瞳に自分の顔を見た。

疲労と諦めに彩られた生気のない目を見ると、濤羅は不思議な怒りを覚えた。

また、守れないのか。また、捨てるのか。また、失うのか。またまたまたまたまた

「まだ、だ……」

そう呟く。

子犬が不思議そうな顔をした。

濤羅は子犬に笑いかける。

「まだ、だ……」

そう子犬に笑いかけ、濤羅は諦めることを止めた。

だが、事態が変わることなど無い。濤羅は満身創痍だし、男達は濤羅を殺そうとする。変わったのは、濤羅の意地でも死なないという覚悟だけだ。

そして、覚悟では何も変えられない。

しかし、その濤羅の変化を察知したのか、子犬の表情が不安気なものから笑顔に変化した。

力強く吠える。

状況を吹き飛ばすかのような鳴き声が周囲に響いた。

男達はそれを挑発と捕えたのか、殺気を増して襲いかかって来た。迫る武器を濤羅は掻い潜る。

蹲るのを堪え、口から溢れそうになる血を必死で呑みこんだ。

力尽きるまで、そう覚悟を決め睨みつける。

男達は一瞬濤羅の気迫に吞まれ動きを止めた。

「ぎゃあああああああ！」

瞬間、五人ほどの男が一気に吹っ飛んだ。

男達は濤羅の事を忘れ振り返る。

そこには一人の女が立っていた。

手には戟を持ち、泰然と佇んでいる。

濤羅は即座に気付いた、この女が強すぎると……。

不意打ちで仲間を吹き飛ばされた男達は、標的を女に切り替える  
と、再び襲いかかる。

女は微動だにしない。

視線は何故か濤羅に固定されていた。

迫る男達。だが、そんな者は路傍の石とばかりに、濤羅と女の視線は真つ向からぶつかる。

男達など相手にならないことを、当の男達以外は理解していた。

男達が振りかぶった武器を振り下ろそうとした。

予備動作もなく女の戟が振るわれた。

一撃で複数人の男達が数メートル吹き飛ばされる。倒れた者は立ち上がる気配がない。

二撃、三撃、四撃。

それで濤羅を苦しめた男達は一人も残っていないかった。

圧倒的な強さに濤羅は感動すら覚える。しかし、敵とも味方ともつかぬ相手から視線を話すことができなかつた。

すると女は、

「セキト……」

と、一言だけ濤羅に呼びかけた。

何のことが解らない濤羅を余所に、腕の中の子犬は嬉しそうに「わん」と吠えると濤羅の懐から飛び出し、女に向かって飛びついた。子犬を女は優しく抱いた。

濤羅はその光景に安堵して、直後視界が暗くなっていく。またこ

れか、と呆れながら濤羅の意識は薄れていき、最後には完全に消えてしまうのであった。

## 飛將軍・杏（後書き）

ということで三話の1終了です。続きは後日。

しかしPCゲーム同士のクロスオーバーなのに恋愛要素ないっすね……。まあ、そのうちということだ。

本編はまじめに書いているのでどうしても後書きはネタみたいな冗談ばかり書きたくありませんね。つまんない？ ごめんちゃい！止める気はないです。反省はしてるけど。

ということだ次回は！

なんと禁断の恋愛ネタ、タオローと于吉の愛がここになる！

「俺がお前を守る」「ええ、その言葉を信じてます」

燃えるLOVEが震えるHERTが揺さぶるPASSION！

第三話後編「男達の愛が止まらない」に、ご期待ください。

勿論、嘘です。

ではここまで読んでくださってありがとうございます。誤字脱字の報告、感想批評お待ちしております。

優しさから強さへ、フォームチェンジだ。

飛將軍・弐（前書き）

第三話の弐を投稿。

やった！ 今回早く書けた！

## 飛將軍・貳

視界が闇に塗りつぶされる中、濤羅は後頭部に温かみを感じた。この世界に来てから毎日のように浴びる太陽の日差しと同じく、包み込む温かさが頭から伝わり全身を温めていく。その熱は体のみならず、心さえも癒しを与えていき、濤羅は安らぎを感じていた。

そこで、自分が目を瞑っていることに気付く。目蓋が光を遮断し、その視界は黒一色の世界だ。

濤羅をゆつくりと目を開ける。僅かに光を感じた。太陽の様な周囲を変える光でも、伝統の様な人工のものでもない、儂く空ろな光がある。

その光は、真上から濤羅を覗き込む顔を映していた。

「……………起きた」

長い沈黙の後、濤羅の目の前の顔が呟いた。

その時、濤羅はようやく現状を把握する。濤羅は、先程助力してくれた少女に膝枕をされていたのだ。視線だけを動かして周囲を見回すと、先程までの路上ではなく、どこか家屋の庭先に連れてこられているらしい。

そこまで理解すると、濤羅は調子を確認しながら体を起こす。それなりの時間眠っていたのか、男達と戦ったときからすればかなり回復をしていた。

「……………ここは？」

「……………恋の家」

「恋？」

「……………恋が、恋」

少女はそう言って自らを指差した。どうやら気絶した後少女に助けられ介抱されたことに濤羅は気付く。

「……………礼を言う」

「……………」



無愛想な瀧羅の感謝の言葉を少女はフルフルと首を振って答えた。

「……………セキト、先に助けてくれた」

「セキト？」

少女の声によるものか、瀧羅の言葉呼び掛けに取ったのか、庭の陰から先程の子犬が出てきて少女の胸に飛び込んだ。少女は危なげなく子犬？ツ止めると優しく頭を撫でた。

「……………この子が、セキト」

「君の犬だったのか」

「……………君じゃない」

「え？」

突然の少女の否定の言葉に、瀧羅は意表を突かれ情けない声を出してしまう。

「……………恋で、いい」

少女はそう言って瀧羅を一瞥すると、再びセキトを撫でることに集中し始めた。

しかし瀧羅は、少女に急に名で呼べと言われ困惑するばかり。何もかもが突然過ぎて、現状における自分と少女の関係が理解出来なかった。

「……………それは、真名か？」

「……………（コク）」

少女は瀧羅に目を向けることなく頷き、他の反応を示さない。それが全ての肯定の意思表示だと受け取った瀧羅はゆっくりと質問を続けた。

「何故、真名を許す？」

「……………お前、きつと優しい」

「……………優しい？」

訳が分からず、いぶかしむ言葉しか出てこない瀧羅を、少女はやつと顔を向けて見詰めた。そこには子供の様な純粹さしか映っていないように瀧羅は感じ取った。

「……………セキト、懐いてた。だから、優しい」

「セキトが……」

「それに……」

少女が言葉を切る。瀧羅はこのゆったりとした独自の調子が少女の特有のものであると察し、決して急かす風にならないよう注意しながら続きを待った。

「……………弱いのに、セキト守ろうとしてた」

そこに含まれていた感情を瀧羅ははつきりと受け取ることができなかった。だが、少なくとも今までに経験したことのない類のものだということは解った。

弱い、という言葉が使われたのは初めてではない。むしろ、内家の剣を正しく理解していない外家拳法家にそう嘲られるのは比較的多かった。そこにははつきりとした敵意と悪意と侮蔑が入っており、瀧羅もそれがある種当然の物として受け入れていた。

だが、少女の言葉は優しさに近い物だ。暖かい気持ちで弱い言われたことに、瀧羅は新鮮な驚愕を覚えるしかなかった。

「……………だから、お前は恋が守ってあげる」

「……………お前じゃなく、瀧羅だ」

何を口にすればいいのか解らず、その場しのぎで先程言われた言葉をそのまま返す。だが、少女はそれに突っ込みなど入れない。ただただ、真直ぐに瀧羅に視線と言葉を向けた。

「……………瀧羅は恋が守る」

そこで瀧羅ようやく、少女が自分に向けている感情を理解した。それは庇護。

守るべき弱者として少女は瀧羅を見ていた。それこそ少女にとって瀧羅は、その腕の中で気持ちよさげに目を細めるセキトと同列なのだ。

だが、不思議と悪い気はしない。常に『守る側』であった瀧羅を守るうとする者はいなかった。瀧羅はいつだって『戦う者』で『傷付く者』、『味方』と『敵』の間に居続けたのだ。

無論、少女が瀧羅のそんな過去や万全の態勢を整えたときの實力

など知る術などあろうはずがなく、純粹に瀧羅を助けたときの様子からその考えに至ったのであろうが、それが貴重な、いや、むしろ懐かしい感覚を瀧羅が覚えたことに違いはなかった。

「ふふ……」

思わず笑みを浮かべていた。笑うなどどれくらいぶりであろうか。とうに捨てたと思っていた感情が噴出してきて、瀧羅自身も困惑する。

「……………恋、強い」

その笑いで瀧羅が本気じゃないと感じ取ったのか、少女はムツとした表情を浮かべ、語気を強くした。

「いや、すまん……」

慌てて謝るが口元の笑みを抑えることは出来なかった。慣れない感覚に戸惑う。少女の強さは疑うべくもない。つい先程、瀧羅の目の前で数人の男を有無を言わずにのってしまったのだ。瀧羅の中で少女の実力は霞と同等か、それ以上のものであるという確信がある。

だが、少女は瀧羅の評価など知らず、ただ自分が笑われていることが納得いかないようだ。

「……………セキトとか、他の子も、恋が助けた」

「他？ まだいるのか？」

「……………皆、もう寝てる。……………でも、犬とか猫とか鳥とか、いっぱい」

本当に優しい子だと瀧羅は思った。一匹二匹なら気まぐれを起す者もいるだろう。だが、どれほどいるかは解らないが、バラバラの種類の動物を何匹も飼うとなると、その人物は余程酔狂としか考えられない。

だが、ここまで話して、瀧羅はこの少女がそう言った類で無いとなんとなく解っていた。少女の価値観や判断基準は人と違つかもしれないが、それに沿って理性的に行動していることが良く解る。真に阿呆なら会話が成立するはずがないのだから。

「……なら、俺も頼むとしよう」  
濤羅はそう答えた。守られてみるのも悪くないと思ってしまったのだ。

少女はそれに、

「……………（コク）」

強く、しっかりと頷いて返した。

濤羅はそれを強い肯定だと受け取り、その手を差し出した。

「よろしく頼む……恋」

恋は無言で濤羅の手を握り返した。熱が伝わってきて濤羅の体を温めていくような気がした。

だが、濤羅は自分から先に手を離す。

「……………行くの？」

恋の問いに今度は濤羅が首肯だけで答えた。恋に守って貰うことに異は無いが、濤羅にはすべきことがある。

月の為に剣を振るう。その誓いを果たすにはいつまでもここで温かい時間を過ごしている訳にはいかないのだ。

恋もそんな濤羅の事情を雰囲気から察したのか、特に止めることはなく戸口の方を指差した。あそこから出ていけという意志を理解し、濤羅は無言でその場を後にする。

お互いに何も言わなかったが、濤羅はまた恋と会うことになるよ  
うな予感を禁じ得なかった。

「濤羅！」

翌日、昨夜の疲弊を多少なりとも軽減しようと、与えられた部屋で静養していた濤羅の元へ、一人の少女が怒声と共に飛び込んできた。言うまでもなく賈馱であるのだが。

「どうした？」

「どうしたじゃない！ あんた昨日何した！」

眦を釣り上げる賈馱の圧倒的な迫力は濤羅をしてもあまり健康に

良いとは言えない代物だった。瀧羅は賈馱の真意を測りかねながらも、慎重に言葉を選んで質問に答える。

「……言った通り、謁見した後、帰りに無法者に絡まれた。助けてくれた娘の家で一休みしてから戻って来た」

前日の帰りが異常に遅くなったため、月が心配したらしく賈馱の機嫌が斜めどころか垂直落下していたため、屋敷に戻るなり尋問の様に事情を説明させられたのだ。恋のことは特に意図はなかったが、こちらに関わりを持たせる必要もないかと固有名詞は出さなかった。「……嘘じゃないわよね？」

重い声音で目を細めて瀧羅を睨んでくる。瀧羅としてもそれ以上の説明はしうがなかった。

「……本当だ。何かあったのか？」

そう問い返すと、賈馱は深く深く溜息を吐く。頭痛がするのにかめかみを押さえて目まで閉じていた。

「……役人が来たの」

「……何でだ？」

「知るか！ さっさと出て行ってあんたが対応しなさいよ！」

そう怒鳴り、蹴り飛ばさん勢いで瀧羅を急かす。釈然としないものを感じながらも、瀧羅は応接室として使われている部屋に移動した。

そこには二人の男が坐している。一人はしっかりと役人の装束を身に纏った男で、待たされていることにイラつきを隠そうともしていない。もう一人は顔に怪我をして、その治療の痕が痛々しい男だった。明らかに最近負った傷と解る。正確に言えば昨夜負ったものだ。

その男は昨夜唯一人瀧羅に倒された男だったのだから。

「あ、こいつです」

「む、来たか」

瀧羅の入室に気付いた二人は、一斉に瀧羅を睨みつける。その様子で事態の大体を理解し瀧羅は溜息を吐くしかなかった。いかに歴

史が流れようと人間の行うことに大差はないらしい。

「董卓殿の客将、孔濤羅だな？」

「ああ……」

「一介の武芸者如きが、私を待たせるとは、礼儀がなっていないな。尊大な役人の言動に濤羅は気力は音を立てて崩れていく。この類の人間に利用価値があることは頭で理解しているのだが、幼少より幫と剣に身を捧げてきた者からすれば酷く醜悪に見えて仕方がなかった。」

「まあ良い。私も多忙な身、貴様如きにいつまでも付き合っている暇などないのだ」

濤羅としても長く相手をされたくないもので、早急に本題に入って貰うことに異論など挿むはずがなかった。

しかし役人は、濤羅の無言の肯定を別の意味で捉えたらしく、その尊大さをさらに増してくる。

「貴様、昨夜何をしたか言ってみよ」

どこその眼鏡軍師に言われた風な言葉をもう一度聞いて濤羅は目眩を起こしそうになった。あまりに使い古された手段に、これから先の展開が濤羅の様な無学な者でも手に取るように解ってしまう。

答えることなく濤羅はこの後の対応に思案を始めた。役人はやはりこれを全く別の意味に捉える。

「言えぬか？ ならば私が言ってみよう。貴様は昨夜、恐れ多くも帝の謁見を許され、その帰り……。不相応な栄誉に酔いしれていたのだろうな。ここに居る男とその仲間には暴行を加えたのだ」

得意満面の役人の顔が人ではなく蛙か魚の様に見えてきた。少なくとも同じ人間の分類に容れたくない厭らしい表情だった。

「証拠があるのか？」

「証拠？ ここに証人が居る。後は貴様を尋問すれば事が足りるのだ」

「へへ、そういうことだ」

役人と男の汚らしい笑みが眼前にあり、濤羅の気分は滅入る一

方だ。

だが、少なくとも十常侍の何進に対する牽制として利用されている月の屋敷にこうして乗りこんでくるのだ。背後で糸を引いている者がいることは間違いない。その正体も確信できる。それ故に、月も濤羅を庇う事が出来ない。？力で解決できる事態ではないのだ。濤羅が皇帝と月の仲介になるなどと妄想している連中を黙らせる手段が現状、月にも濤羅にもない。それが現実だった。

「さあ、大人しくこちらに従って貰おう。もっとも、お前の心が次第では上に取りなしてやらんこともないが」

立場さえなければこの場で殺すことも考えてしまうほど、役人は腐りきっていることを濤羅は実感した。戦乱の世になることも無理からぬ。

こんな小物をしとめるのに武器など必要ない。濤羅からすればただの一撃でその命を断つことは造作もないのだ。

しかし、それをすれば間違いなく火の粉は月に降りかかることになる。権力争いの真つただ中の洛陽で優しすぎる月がこうしていられるのは、偏に賈馱の力によるものだ。齒を食いしばって月を守ろうとしているからこそ、濤羅に対してあもきつく当たる。それが解るから、ここで無にするようなことは出来なかった。

「どうする？」

「一応言っておく。襲いかかって来たのはそいつらだ」

「ほう、そうなのか？」

「いいえ、襲われて怪我をしたのはこちらです」

「そうだな」

茶番としか表現できないやり取りを齒がゆく思う。しかし今の濤羅にその茶番を止める力はなかった。

だが……、

「……………嘘」

部屋の外から声が届いた。ゆっくりとした声だったが、はっきりと部屋の中の者達へ伝わる。

「……………襲われてたの瀧羅の方だった。恋、見た」  
「恋！」

扉を開け、声の主が入室してくる。それは昨日瀧羅を助けた少女、恋であった。瀧羅は慌てて立ち上がり恋の傍へと歩み寄る。

「恋、どうしてここに？ いや、それより何故そんなことを言った？」

無意識的に非難の口調になってしまふ。だが、それは瀧羅の偽らざる本心でもあった。現状で、昨夜の真実を知っていると、恋も瀧羅と共に尋問を受け、最悪殺されるかもしれないのだ。

その不安が、瀧羅の中で急速に膨らんでいく。最悪月に頭を下げても賄賂を払って、恋だけは救わなければ、とまで考えた。

「あ、あなたは！」

しかし瀧羅の心配を余所に、役人は震える声を出した。見てみると、目を見開いて恋を指差し、全身が瘡の様に震えている。

瀧羅がいぶかしんだ視線を向けるが、役人には全く目に入っておらずただ恋を見つめて震える叫び声を上げた。

「呂、呂、呂、呂布將軍！」

「なんだと！」

役人の悲鳴に瀧羅も驚愕する。恋がああ飛將軍・呂奉先だというのだ。あまりに想定外の事態に役人と一緒になって驚くしかない。しかし、今考えてみると思い当る節はいくつかあったのだ。張文遠以上の実力者で、戟を持ち、おまけにセキトを飼っている。さらに、瀧羅は呂布が『恋』という真名であることは小耳に挿んでいたのだ。

「……………恋が見てた」

「な、な、何をですか？」

「……………瀧羅、悪くない」

「そそそそそ、そうですか、解りました！」

では失礼します、と役人は一息で言いきるとさっさと風のように退席した。男も慌ててその後を追いかける。



二人の来客がいなくなり、部屋には濤羅と恋が残された。

「恋が、あの呂布だったのか」

「……………言わなかった？」

「聞いてないな」

忘れていただけか、それとも驚かせたかったからか。後者ならこの上なく成功と言えるだろう。濤羅は驚愕のあまり、何を言えばいいのか解らなかった。

「……………また、助けられたな」

「……………濤羅は、恋が守る」

完全に昨夜の焼き直した。これ程自分の無力を痛感させられるとは思わなかった。恋は濤羅を守ることで濤羅が守ろうとした月さえも守ってしまったのだ。

言葉を続けることができない。濤羅は今、無力感に苛まれるだけだ。

だが、それを打ち破る者がいた。

「ちんきゆう・きいーくっ！」

扉が開くと同時に何者かが濤羅に飛びかかって来たのだった。

濤羅は軽くかわす。

「は、はれ？」

飛びかかった側はその勢いそのまま壁に激突しそうなところを、恋が襟首をしっかりと掴んで止めた。

ぐえ、という苦しそうな声がしたが誰も気にしない。

「……………知り合いか？」

「……………恋の軍師で、ねね」

そう言って、恋は襲撃者を床に下ろした。襲撃者はまだ幼さの残る小柄な少女であった。

「お前、恋殿から離れるです！」

「……………ねね、自己紹介」

ねねと呼ばれた少女はぐっと息を呑み、嫌そうに、本当に嫌々ながら自己紹介をする。でもどこか誇らしげという非常に複雑な感情

を表しながら。

「ねねは陳宮、字は公台。恋殿の軍師です！」

胸を張って自信満々の陳宮に恋は補足をした。

「……………真名は音々音」

「恋殿〜！ どうしてねねの真名を教えちゃうのですウ！」

「……………？ 恋も教えた」

「なんですとおおおおおおおお！」

部屋中に響き渡る陳宮の悲鳴。表情がころころ変わり見ていて飽きなかった。これが子供らしさなのかと、濤羅はどこか感慨深く感じていた。

その間にも事態は進展していく、決して止まることなく。

「真、真名を預けたとは本当ですか！」

「……………本当」

「いけません、恋殿！ こんなどこの馬の骨とも解らない奴に！」

「……………濤羅、優しい」

「恋殿おおおお！ 目を覚ましてください！ 明らかに気がない目、窪んだ瞳、意味もなく高い背！ どこから見ても怪しい、むしろ怪しさしか見えませんです！」

「……………ねね！」

恋の語気が少しだけ強まる。それだけで先程までの勢いは何処へやら、陳宮はびくつと震え小さくなった。

「……………いきなり人のこと、怪しいとか言っちゃ駄目」

「でも……………恋殿お〜」

「……………大丈夫、濤羅怪しくても、優しい」

怪しさに対する否定は一切ないことに、濤羅は密かに傷付くが、この際それは全力を以って無視することにした。何やら陳宮が意を決して濤羅に視線を向けたからだ。この上ない敵意を孕んではいたが。

「……………しかたないから、ねねを真名で呼ぶことを許してやるです！  
でも！ 恋殿に指一本でも触れたらちんきゅっきゅをお見舞い

するです！ いつでもねねは恋殿の傍にいるから気を付けるです！」

「……………？ 昨夜はいなかったか？」

「……………あの時、ねね、もう寝てた」

「ねねが寝ている間に、恋殿が怪しい男に丸め込まれてしまったです！ ねね、一生の不覚です！」

頭を抱えるねねを見て、濤羅はこれからまた一層この世界での生活が荒たらしいものになると予感するのであった。

## 飛將軍・式（後書き）

以上で三話は終了です。

やったね、恋登場だよ！ あとねねも！

でもこの二人の台詞、独特すぎて書き辛え！ あとねねって書く  
とひらがなばっかで読み難い！

前書きにも書いたように今回驚異のスピードで書けました。偏に  
皆様の応援のおかげでございます。（してくれてますよね？）

さて、恒例の次回予告。

遂にあの最強の武将が登場するよ。誰だつて？ 無く子も黙る華  
雄將軍さ！ 華雄將軍は凄いんだよ！ なんとつて無印恋姫でただ  
一人殺られるシーンがあるんだから。パイパイちゃんなんて死んで  
ましただからね！ しかも張飛のものまねがとっても上手なんだ。  
まるで本人さ！

そんなみんな大好き華雄將軍が大活躍する次回は「華雄帰還」お  
楽しみに！ ……出来るのか？

最後に、ここまで読んで下さった皆さんに無情の感謝を。誤字脱  
字・感想批評は随時受け付けておりますので、よろしく願います。  
す。

みなんで幸せゲットだよ！

華雄登場・巻（前書き）

遅くなって申し訳ありません。第四話、投稿です。これで董卓陣  
営勢揃い。長かった、いや、長かった。

## 華雄登場・壱

争いも無くただ平和な時を過ごすというのは闘いを生業としていた瀧羅にとつて久しくない経験だった。懸念していた十常侍もこれといつて手を出してくることがない。もっとも、療養を第一としている今の瀧羅の生活には何かをする方が難しいのかもしれない。

尤も、そうやって平和を享受できているのは月と賈馱の力であることは瀧羅も重々承知している。腐りきった朝廷の下では、明日をも知れぬ民衆が溢れており、世は荒みきっていた。

事実、史実通りに黄巾党の乱が起こっているのは瀧羅も聞き及んでいる。その討伐のため、恋もねねも霞も出払っており、今は屋敷の主要な面子は月、賈馱、瀧羅の三人しかいなかった。

細部は違えど、この世界の大局は瀧羅の知るように乱世への世相を表し始めている。その先にある運命、歴史を変えることを己の為すべきことと見定め、瀧羅は時勢を待っていた。

今は、それまでの僅かな偽りの平穏である。

「てゆうか、なんで僕達がいいつの部屋でお茶してるわけ？」

そんな賈馱の不平不満までどこか優しく感じてしまう。

「もう、詠ちゃん。瀧羅をあんまり出歩かせたくないって詠ちゃんが言ったんじゃない」

「そうだけど！ なにも月までいいつの部屋に来ることないじゃない！」

ある種、いつも通りの光景に瀧羅は微笑ましささえ感じてしまう。瀧羅と懇意なろうとする月と、瀧羅を敵視する賈馱。この二人の意見の対立は見ていて飽きることがない。最終的に賈馱が折れて丸く収まるのが解りきっているので、安心して見ていられるということもある。その結果、賈馱の敵意が蓄積されていくことを除けばだが。

瀧羅としても愚鈍ではあれど野暮ではないつもりだ。誘われれば

断る理由もない。二人の話声を聞きつつ、月が淹れてくれた茶を飲む。

「……美味しいな」

素直な感想が出る。水も葉も、瀟羅のいた世界では考えられないほどに清らかで自然の香りが立ち込めていた。人の手による汚れを知らない、まさに大自然の恵みと言って差し支えないその茶は、瀟羅に感動を呼び起こした。

さらに、瀟羅の様な武骨者でも解る程に、淹れた人間の腕が良い。旨みを最大限に引き出しつつ、渋みを最小限に抑え、香りが引き立つように工夫された茶は衝撃でさえあった。

その気持ちをたった一言でしか表せないことが悔やまれるが、月はとても嬉しそうに微笑んだ。

「ふん、月が淹れてくれたんだから、美味しいに決まってるじゃない！」「

「こういうのは女中の仕事じゃないのか？」

賈馱の発言を受け流して月に問いかけると、月は笑って、

「家事をするのは好きだから」

君主らしくない台詞だと思うが、それがまた月らしくて好感が持てる。とても暴君・董卓には見えなかった。

「そういえば、あんたの怪我を治す目途が立つかもしれないわ」

突如賈馱がそう言った。瀟羅の体は臓腑や肺腑がズタズタの死に体だ。筋肉や骨などは治療で治しようもあるが、後漢の時代、医療と言えば漢方や祈祷が主流のはずなのに如何にして目途を立てたのか。まさか賈馱が怪力乱神を語るとは思えない。

「本当、詠ちゃん！」

「うん、何でも五斗米道の華佗って流れの医者が、どんな病でも治してしまっつて噂が流れてるんだ。もし本当なら、こいつの体も治せるかも」

「……で、そいつは何処に居るんだ？」

「さあ？ 僕が知るわけないじゃない」

賈馱は至極あっさりと言つてのけた。

「それじゃあ、意味がないだろう」

「何で？ 折角希望になりそうな話をしてあげてるんだから喜ばないよ。ここまで噂が流れて来る医者なら、洛陽に来ればすぐに解るって」

賈馱らしくもない楽観的な発言に違和感を覚える。勿論、濤羅のことをその程度にしか認識していない可能性も十分にあるが、自らの智を誇る軍師の誇りがそれを許すかどうか。根っからの武人である濤羅には判断がつきかねた。

「でも、噂が本当なら濤羅、元気になるかもしれないね」

月が心底から嬉しそうに笑う。それだけで賈馱への疑惑は霧散してしまった。かなり濤羅の容体を気にしていたらしいことがその安堵の表情から察せられる。月の前で吐血するような失態を犯した覚えは濤羅にはないが、心配性の月ならばそれも十分に考えられることだ。口には出さないが、恋達の出陣の際も気に掛けている様子が見て取れていた。

「御馳走様、さ、月、仕事に戻ろう」

「うん、そうだね。じゃあ濤羅、ゆっくり休んで無理しないで」

手際良く茶の後片付けをすると、月と賈馱は連れだつて濤羅の部屋を出て行った。悪態をつくのは相変わらずだが、それでも賈馱の対応は幾分か柔らかくなつたように思う。月や霞、恋が濤羅に好意的なために諦めの境地に至つただけの可能性もあるのだが。

そんな風に考えていると、賈馱が一人で部屋へと戻つて来た。忘れ物でもしたんだろうか、と周囲を見てみるが、濤羅の目にそれらしいものは映らなかつた。

「あんた、さつきみたいなこと二度と月の前で言わないでよ！」

賈馱は明らかに怒っていた。先程までとても一緒に茶を飲んでいたらと思えないほど、目を吊り上げ口調がきつくなっている。しかし濤羅の方に心当たりはなかつた。

「さつきの、とは？」



「華佗の噂が意味無いとそういうこと！」

意味が解らない。現代的な思考から言えば『奇跡の医師』を信用する方が無理というものだ。そして賈馱はそういう面は酷く冷静で達観している。

「月が心配するでしょうが！」

「……月が？」

想定外の名前が出たことに呆気に取られる。いや、むしろこれ程まで常ならぬ賈馱の様子を見たときにその可能性を考慮してしかるべきだった。賈馱が自身を曲げるとすれば、それは月の為に決まっているのだから。

「……何故だ？」

「あんたが血を吐いて倒れたって言ってずっと心配してたの！」

「………いつ？」

「霞との手合わせの後。月、あんたの部屋に労いに行ったのよ。霞がいたから任せてそのまま戻ったって言ってたけどね」

「………そうか」

「それと、恋からもそう聞いたって」

不覚。そう内心自分を罵らずにいられない。一切余裕がない状態だったとはいえ、恋に口止めをし忘れただけならまだしも、月に見られていた上に、そのことに気付きもしなかった。

「だから少しでも月の気が休まればと思って、華佗の噂を手に入れたのにあんたは……」

賈馱の肩が怒りに震える。

「余計なこと言って！」

胸倉を掴まれる。

「これ以上月を心配させてみなさい！ どんな手段を使ってもぶっ殺すからねっ！」

「ぐっ………！」

襟首が絞まり呼吸が乱れる。調息の乱れはそのまま瀟羅の内傷の痛みを呼び起こした。

しかし、今はそれも気にならない。目の前の憎悪にも近い怒りの形相を見て、そんなものを気に掛ける余裕はない。今向けられる思いは、賈馱の物であり、賈馱を通して出る月の感情。それが解るから、濤羅は黙り込むことしかできなかった。

「僕はね、祈祷でも妖術でも頼るわよ！ 月の為ならね！ あんたはもつと必死になれ！ そうやって悟った風に無気力に生きて、それだけならまだしも、月に迷惑掛けるくらいなら、さっさと死ねばいいのよっ！」

解放、というよりは突き飛ばすように賈馱は濤羅から手を離れた。勢いで一瞬だけ濤羅がよろめく。その様子を見て、賈馱はこれ以上は言うことはないとはかりに部屋を再び後にした。

それを濤羅は呆然と見送る。

賈馱の言う通りだった。なんの反論もしようがない。守るつもりだった、守っているつもりだった、そんな愚かな過ちを濤羅は再び犯してしまったのだ。

自嘲する。度し難いほどに愚かな自分に対して嫌悪感さえ抱いた。何故、濤羅の妹は苦しんだ。何故、親友は狂気に走った。何故、濤羅は全てを失った。

それは自らの愚鈍さ故だ。妹の苦しみも、親友の狂気も、何もかもに気付くことができず、ただ自分が安寧としてしていると誤解しているだけだった。

それは濤羅の罪に他ならない。いかに取り繕う言葉を並べたとて、いかに後悔の念を吐露したとて、贖いきれぬ咎なのだ。

「……………」  
唯の一言も発することなく濤羅は部屋を出る。人が見れば幽鬼と見間違わんばかりに濤羅からは生の気配が消えていた。

長く続く廊下を歩く。誰かとすれ違ったような気がした、庭の景色を横切ったように思う。だが、その全てが濤羅の意識に上らない。

濤羅の思考を埋め尽くすのは、逝かせた親友と生かした妹。共に歩む幸多き未来を濤羅が壊してしまったもの。後悔の念は濤羅の心

を未だに焼き、癒えることを知らない。

それでも、その傷から目を逸らすことはできなかった。瀧羅の過去は既に未来への繋がりを失ってしまっている。だからこそ、そこから逃避することは全てを否定してしまうように思われた。親友の空虚さも妹の絶望も、全て瀧羅が救えるはずのものだった。気付けるはずのものだった。

二度とあれをくり返したくない。それは瀧羅の偽らざる本心であり、願望だ。しかし瀧羅はやはり気付くことなく、再び愚行を犯した。いや、犯しそうになった。

度し難い。そう自分を罵ったとて意味などない。すべきことは他にある。

「……………入るぞ」

逡巡するも、目を閉じて一呼吸で躊躇いを吐き出し、静かに扉を開けて入室する。

「瀧羅、どうしたの？」

そこは月の自室だった。執務室に居るかとも思ったが賈馱も一緒にいるだろうと考えると訪問し辛く、駄目元で来てみたのだが、珍しく瀧羅は幸運に見舞われたらしい。

「……………話したいことがある。構わないか？」

「どうぞ」

月が進めてくれた椅子にゆっくりと座る。どことなく落ち着きが悪い瀧羅は無意識に室内を見回した。質素ながらも女性の雰囲気漂わす装飾や、細やかな細工の施された家具が高貴な空気を生み出している。

「……………心配掛けて……………すまなかった……………」

言葉を選び絞り出すも、幼稚な謝罪しか出てこなかった。だが、月は聖母の様な笑みを瀧羅に送る。

「詠ちゃんが言ったんでしょ？」

「……………何？」

呆けた声。実戦であれば致命的となる程に瀧羅は虚を突かれた。

あまりに瀧羅らしくない隙に月はクスリと笑う。

「詠ちゃんのは、何でも解るから」

「……………そうか」

絶対的な信頼と理解があつてこそその月の台詞に、瀧羅は頷くしかなかった。

だが月は、それに悲しそうな顔をする。

「……………でも、瀧羅のことはまだ解らないの」

「……………」

「だから言ってくれないと、心配するよ……………」

再び脳裏に走るのは妹の映像。

そうだ、こうやって、不機嫌になるからと命懸けの仕事をいつもギリギリまで黙っていた俺を、あいつも心配して待っていた。妹だからと甘えて我儘を言っているのだと思っていたが、そんなことはない。誰もがそうやって不安や懸念を持っているのだ。

嘗ての妹の言動が何ら特殊なものではないとようやく瀧羅は思い至った。愚鈍であることを強く再認させられる。その妹の様な少女に、自分がすべきことすら明示されていては尚更だ。

「……………解った」

そして瀧羅は訥々と現状を語る。確実に月にとって心を痛める内容だろう。だがそれでも、瀧羅は包み隠さず話すことにした。

外面上はいくら癒えたように見えても臓器に負った内傷は殆ど回復していないこと。それが治る見込みがないこと。それが、既に致命傷に等しいこと。

月は静かに耳を傾ける。瀧羅が全てを語り終えるのを待っていた。「近いうちに、俺は死ぬ」

そう瀧羅は現状を締めくくった。

部屋を沈黙が支配する。言葉の見つからない瀧羅はそつと月の様子を盗み見た。無言の月、唇をきゅつと噛みしめ視線を床に落としている。その目が表す感情を瀧羅は正確に読み取れないが、少なくとも悲観・憐憫の様なものではなかった。

「……ありがとう、言ってくれて」

月は呟き、真直ぐに濤羅の瞳を見つめる。優しさと強さの同居した月の眼に、濤羅はここに至って漸く気付かされた。

薄々理解していたのだ、濤羅の命が風前の灯であることを。月にとつて今の濤羅の話など唯の確認作業にしか過ぎなかった。本人の口から告げられるまで、それを唯の推測、思い込みであるとしたかった。だから、問い質すことなく時が過ぎていったのだ。だが、知らなければそれはそれで不安の種となり、月の心を蝕んでいたのだらう。

「……………」

濤羅の口からはもう言葉は出なかった。いったい何を言えるかと？ 周囲に自分が与える影響も考えず、日々を漫然と過ごし、結果として力になると誓った少女を苦しめている。賈馱が激昂するのも当然だ。むしろ、今ここで濤羅は自分自身を殴り飛ばす衝動にすら駆られた。それが自己満足に過ぎない故に、拳を握りしめ衝動を抑圧するが。

「……もう、無理はしないで」

濤羅は小さく頷く。守れるはずもない約束だ。この先の歴史が、濤羅の知る史実に沿って展開されるのなら、濤羅は必ず無理をするし、するべきだと考えている。

それを月は感じ取ってるのか、一瞬目が潤む。しかし、それを濤羅が確認する間もなく笑顔を作ると、

「約束だよ？ 本当に心配するから。霞さんも恋ちゃんも私も、詠ちゃんも」

「……賈馱が？」

「やっぱり気付いてなかったんだ」

突拍子もない名前に濤羅は意表を突かれ、月は呆れ顔でその様子を見る。しかし濤羅にはそれがあまりに荒唐無稽な話にしか感じられない。賈馱からは一方的な嫌悪の感情を抱かれているとしか思っておらず、月の話を聞いた後でもそれを否定することが出来なかつ

た。

「私から言えることはこれだけ」

月のその言葉に瀧羅はこれ以上の長居は無用と判断し、会釈をして退出する。月の視線を感じながら外に出て、中の様子が視界から消える位置に來ると月が細い声で呼び止めた。瀧羅は振り返ることなく足を止める。

「瀧羅、無理はしないで……」

その一言に込められた思いは瀧羅には推し量れない。だが、その重さだけはしっかりと瀧羅の心に打ちつけられた。

引き摺る様な足取りで自室への通路を歩いていく。手持無沙汰なのは間違いないが何かをしようという意欲は起きない。いざというときの為にも多少なりとも回復が必要であることも確かだった。

だが、世界の流れは瀧羅に対して優しくなく、そんな思惑は間をおくことなく否定されてしまう。

「おい、お前！」

背後から聞き覚えのない声で呼び止められ振り返ると、やはり見覚えのない女が仁王立ちしていた。おまけに女の方もそれは同様だったらしく、瀧羅に対して露骨に不信の目を向けてくる。

「さつき董卓様の部屋から出て来たが、何者だ？」

そう問われれば瀧羅も答えるしかない。

「月の客将をしている。名は孔瀧羅」

「董卓様の客将？ では貴様が、張遼をけつちよんけつちよんにしたという怪しい男というのは？」

返答に窮する。確かに張遼を破り、身元も確かではない状態だが、明らかに女は誇張された話を鵜呑みにしていた。

「……多分な」

断定は避け、あえて弱く頷く程度に止めておく。瀧羅なりの配慮ではあったのだが、女はそんな心配りに一切頓着せず興奮して声が大きくなっていった。

「そうか！ 私は華雄！ 董卓様の臣下だ！」

胸を逸らす華雄に内心瀟羅は溜息を吐かざるを禁じきれない。自己主張の激しい人間を瀟羅はあまり得意としていなかった。

「では、瀟羅とか言ったな。私と勝負しろ！」

「……………は？」

瀟羅自身、思考が停止し自分がかかなり間の抜けた表情をしているのは解るが、それを治すほどの力が湧いてこない。しばし阿呆のよう口と目を開いて華雄を凝視していた。

「は？ ではない！ お前が張遼を破ったと聞いたぞ！」

「……………誰からだ？」

「張遼本人からだ」

話を聞くと、黄巾党との戦いは一応の終結を見たらしい。その際、戦果の功労等の事務的な作業を恋・ねね・霞に任せ、三人より先に出陣していた華雄軍は洛陽の帰還したらしい。その話をしていくときの会話で瀟羅の話題が上がり、華雄は興味を引かれたとのことだ。

「あの張遼を破った程の武士なら相手にとって不足はない！」

そう断言する華雄に瀟羅はあっさりと背を向ける。

「その気はない」

当然だ。つい先ほどの月の言葉を忘れるほど瀟羅は耄碌してはいない。華雄の気持ちは武人として理解できなくもないが、それでも優先するほどのものではなかった。

だが、華雄はそれが気に入らないらしい。

「待て！」

そう叫んで瀟羅の肩に手をやり抑え止めようとした。

瞬間、逆の手で瀟羅は華雄の手首を掴み引く。

同時にそのまま捻りあげた。

引っ張られ前方に流れた華雄の体は、抑えられた手首を中心に一回転する。

紙の様に宙を舞い、華麗に背中から通路に落下した。

その顔には驚愕の表情が張り付いている。

呆然として床に大の字になっていく華雄を後目に、瀟羅はその場

を去る。この程度は無理の内に入らないだろうと胸の内以自己と月に対して精一杯の言い訳をしながらだ。

「何だとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

華雄の叫び声が響いたときには、濤羅は既に自室に戻っていたのだった。その直後に賈馱の怒声が屋敷を揺らしたのは、濤羅には無関係の話だ。



## 華雄登場・壱（後書き）

ということで、四話の壱が終了と相成りました。ヤフウウウウウウウウウ！

有難いことにこの小説を余所のサイト様で紹介して下さい下さった方がいて、感激しております。ここでそのお礼を。どうも、ありがとうございます。

拙作をお気に入り登録して下さい下さっている方、感想を書いて下さる方、読んでくださっている方。皆さまのおかげで、こうしてここまで書き続けることが出来ました。厚く御礼申し上げます。

さて、話は変わって次回。タイトルの割に呆気なく終わってしまった華雄將軍。次は見事に逆転するのでしょうか？

次々と倒れていく仲間。その時、華雄の怒りが頂点に達する。「張遼のことかあああああああああ！」

その時、華雄は限界を越え、新たな伝説の超戦士スーパー華雄が誕生した。

惑星を震わせる頂上決戦、勝つのは瀟羅かスーパー華雄か？

次回『怒り爆発！！ 華雄よ、みんなの仇を討つてくれ！！』

最後に、ここまで読んで下さった皆さんに無情の感謝を。誤字脱字・感想批評は随時受け付けておりますので、よろしく願いします。

伊達にあの世は見てねえぜ！

**華雄登場・弐（前書き）**

次話投稿です。

時間かかったなあ……。

## 華雄登場・貳

「あはははは、そら災難やったなあ！」

徳利を片手に周囲の喧騒をかき消す程の大声で、霞が腹を抱えて笑い転げる。昼食時の酒家は一時の休みと午後への活力を求める者達で溢れかえっており、食欲をそそる香りと共に人々の声で満たされていた。その中で一際大きな霞の声に、客の注意を集めているが本人は一切気にも留めない。酒の力も手伝っているのは間違いないが、それでなくとも濤羅の苦勞が楽しくてしかたがないらしい。

「……笑い事じゃないんだが」

嘆息する濤羅は、霞と対照的に沈んだ表情で溜息を吐く。天下の張文遠が真昼間から飲んだくれてる姿を後世の誰が想像できるであろうか。

「まあ華雄の気持ちも解らんでもないんやけどな。それにしたってあいつしつこいからなあ」

霞の言うことを濤羅はこの三日間身を以って思い知らされた。とにかく華雄が隙あらば勝負を挑んでくるのだ。初対面であっさりと投げ飛ばされたことを根に持っているのか、將軍の地位にありながら暇を見つけては勝負だ決闘だ手合わせだと、言葉は違えど同じ要求を繰り返す。しかし濤羅も、月との約束の手前、意味もない闘いには乗り気ではなかった。故にこそ、療養中の身でありながらこうして屋敷の外へと逃げ出して来たのだ。霞に捕まりこうしてさし向いで酒を飲むことになったのは御愛嬌というものだろう。

「で？ 今日まで何回挑戦されたん？」

「……十一回」

「結果は？」

「……五度ほど転ばした。三回投げて、残りは自滅」

少しでも華雄という人間のとなりを知っていれば想像に難くないが、気持ちの良い程直情的な性格で、行動の全てにそれが現れて

いる。霞から密かに戦場で特攻を掛けた話等を散々愚痴られおり、  
濤羅の華雄に対する評価を裏付けられていた。

内家の拳を持つてすれば、相手を触れた相手を転倒させるなど兇  
戯にも等しい。相手の力にこちらの頸を合わせ呑み込む。船が流れ  
に攫われるように相手の攻撃は見当違いの向きへと流される。結果、  
濤羅は殆ど力を入れることなく華雄を倒してしまった。

外家の者では何が起こったのか正確に把握することは出来ないだ  
ろう。根本的な原理が違うのだ。

しかしそれでも、仮に霞ならば警戒して二度目は慎重に慎重をき  
した拳動をするだろう。何かをされたこと自体には理解がいくはず  
だ。だが華雄はそうではない。良く言えば真直ぐな、人によっては  
単細胞と評価されるその性格故に、何度も何度も同じように挑んで  
きたのだ。その結果も常に同様だったが。

「……そら意地にもなるで」

霞が酒を呷った。

「華雄やって武人の誇りつちゆうもんがある。軽くあしらわれたら  
納得がいかんのも無理ないわ」

「……俺とて、理解できない訳ではない」

「じゃあ受けるんか？」

「……………それが出来れば苦労せん」

再び濤羅は溜息を吐く。三国志の世界に来てからそれなりの日数  
が過ぎていく。その間、濤羅が行った戦闘は二回。霞との模擬戦と  
恋に救われた十常侍の刺客との一戦。そこから既に、濤羅は己の状  
態を正確に理解していた。導き出される結論は唯一つ、華雄の期待  
に応えるには命を掛けてあまりある。

ぐつと盃を霞は呷る。

「まあ、簡単に鬪るやつたら華雄より先に、うちがぶつ殺しとるけ  
どな」

僅かな殺気を滲ませた。他のものとは明らかに違い、その一言は  
圧倒的な力を持つもの。洒落や冗談ではないと伝わってきた。

「……気を付けよう」

濤羅の返事に霞は満足気にその相貌を崩し、空になった盃に酒を注ぐ。店に入つて既に五杯目だった。

「ん〜、濤羅も難儀しとるなあ」

心の底から他人事のように明るい霞の声からは、濤羅の苦難を楽しんでいるのがありありと。濤羅は深いため息は、残念なことに未だ完売しなかった。

「……楽しそうだな」

「そら楽しいで！ 最近むつかつくことばかりやったからなあ！ 盃を一気飲み。卓に力一杯叩きつけた。一滴も酒が零れないところを見ると、全て飲みきってしまったらしい。」

「上がごたつくくんは勝手やけどな、そのツケを下に押しつけられたら敵わんわ！ 命がいくつあつても足らんつちゅーねん！」

酒を注ぎながら霞は怒鳴る。

「……そんなことを口にして大丈夫か？」

「構へん！ これくらいでどうこうなるかい！」

濤羅の心配を霞は鼻で笑った。上層部批判が耳に入ればそれこそ洒落や冗談では済まないはずなのだが霞は全く意に介していない。

とは言え、濤羅は政治的な力関係に対する理解は乏しい。霞が問題ないと考えているのなら濤羅が口を出す必要はないと判断した。

「……また十常侍が何かしたのか？」

自作自演の騒ぎで濤羅を貶めようとしたのは記憶に新しい。だが、霞はそれを即座に否定した。

「ちやうちやう、何進大將軍様の方や。まあ十常侍の狒々爺共も関係あるけどな」

話に熱が籠り、盃を持ツ手が震えている。

「あの大將軍、皇后の姉やからって好き勝手しおつてからに！」

「……………」

「て、そっか。濤羅は今の状況をよう解つてなかつたんやっけ？」

「ああ」

濤羅の返事に霞は難しい顔を見ると、盃を卓に戻し唸った。

「ん〜、十常侍と何進が権力争いしてんのは知つとるよな？」

「概要程度だが」

当然それは三国志という書物からの知識である。

「ほんならどつから話したらええやるか」

「……月がどうして洛陽に居るのか、で頼む」

「賈馱から聞いた話になるけどええか？」

無言で濤羅は話の先を勧めた。濤羅の知る正史では、董卓が洛陽に入るのは霊帝崩御後、十常侍と何進の権力争いに決着がついてからのはずなのだ。

「月はな、元々涼州ちゆう所に居ったんや。賈馱つちと華雄はその頃から月と居ったらしい。でも、そこは匈奴の侵略がきつうてな。

いくら賈馱つちでも独力での防衛は限界がきた。そこで賈馱つちは、朝廷の力を頼ろうとしたんや」

「だが、腐敗しきった朝廷にそんな力が？」

「ない。だから賈馱つちは逆にその権力争いを利用したんや」

「……利用？」

「宦官は権力はあっても武力を持てん。逆に董卓は武力があっても権力がない」

「そうか……。董卓の軍事力を貸す代償として宦官の権力を借りれば、それで涼州の防衛線を張ることができる」

「そういうことや。ところがこの動きが何進にばれる。軍の頂点に立つ何進としては、政敵が力を持つんを見過ごすわけにはいかん。だから先に手をつって自分直属の部隊にしたんや」

「何故その宦官との取引が何進に漏れた？」

「賈馱つちがそんなへまする訳ないやろな。ちゅーことは消去法で

「

「十常侍か……。救いようがないな」

「全くや。直接被害を受ける方は堪ったもんじゃないで」

霞は盃を一気に飲み干した。様々な思いを同時に呑み込んだ様に

濤羅には見えた。

「だから十常侍は月を守るんや、いざいう時に自分達の剣としてな。何進からは逆に目の上のたんこぶ。せやからって、唯追い返すことは出来ん。やったら使い潰したる思てあれやこれや無理難題を押し付けて来るんや」

理解と同時に憐憫の念が濤羅に去来する。濤羅が知らないだけで、あの心優しい少女が否応なく権力争いの混沌へと引きずり込まれ、逃げることにすら許されない状況に置かれていたのだ。唯剣を振るうしか能のない、今やそれすら儘ならない卑小な己が、一体何をできると言うのか。こうして思うことしかできない自分に対する憤りが胸を焼く。

「……あんま、考え込まん方が良えで。禿げるしな」  
「……そうだな」

おどける霞に濤羅は僅かだが救われた。このまま答えの出ない思考の袋小路へと陥るのを止めてくれた霞に密かに感謝する。体調が良くないときは暗く考えてしまいがちだ。ただ憂うだけで変わるものなどありはしない。現状の可能性を吟味していくことこそ必要なのだ。

「俺の様な無知蒙昧が思い至ることなど、既に賈馱は承知だろう」  
濤羅の呟きに霞はにやりと笑い酒を呷る。

「そうやるうな。まあ、今濤羅が出来ること言うたら」  
「店主、席は空いてるですか？」

さし向いに座る霞の言すら遮る大声が店の入口から響いてきた。二人はその声に釣られて目を向けると、そこには二人の見知った顔があった。

「……………濤羅」  
「げっ、です」

それは呂布、陳宮の二人だった。ねねは明らかに嫌悪の表情を浮かべていたが、恋は濤羅を認めた直後に真直ぐ傍へと歩いてくる。  
「れ、恋殿！ この店は止めておくです！」

「……………？ 席、空いてる」

必死で腕を引くねねに首を傾げて見せながら、恋は濤羅の隣の椅子に手を掛けた。四人掛けの卓に霞と濤羅で座っていたので、ちょうど二人分の空きがある。

「いや、でも……………」

「……………ここ美味しいって、ねね言ってた」

視線が左右に忙しく泳ぐねね。脂汗を流し唸り声を上げるその様子を恋は不思議そうに見つめるが、真意には至らない。

「……………では、その席にはねねが座るです」

恋もかくやという程の間を持ってねねは言葉を絞り出した。胸の内での葛藤にとりあえずの決着を付けたらしい。濤羅を睨みつけながら恋に霞の隣を勧めるねねの姿は、どこか憐憫を誘う悲壮さが見とれた。

「……………ふう」

溜息を一つ吐いて濤羅は席を立つ。誰もがその意図を理解できずにいるうちに、移動し霞の隣の席へと腰を下ろした。その瞬間、恋以外の二人が濤羅の意図に気付き反応を返す。

にやにや笑う霞と、喜びと反発の混ざった複雑な顔のねね。対照的な二人の反応を恋が首を傾げるばかりだった。

「恋殿、どうぞお座り下さい！ 何を食べまるですか？」

「……………肉ま？」

探究心も食欲の前では塵芥の如し、だったらしく勧められると即座に着席し採譜も見ずに注文をねねに伝える。

「どんどん頼み、今日は濤羅の奢りや！」

「……………何？」

酒を飲む手を止めることない霞の言葉に濤羅は意表を突かれる。

「今濤羅が出来ることや！」

「……………」



調子の良い霞の発言を濤羅は無言で睨みつける。確かに奢る程度の持ち金はあるが、これは客将としての対価。名目上のみの客将でしかない濤羅に月の好意として貰ったものなのだ。屋敷で療養していた濤羅には使う機会がなかった為にそれなりの額は残っているし、先にも使う当てはないが、こういった風に気軽に飲食いの払いにするには少々気が咎めた。

だが、それも即座に決着がつく。董卓軍最強の武将が動いたのだ。「……………本当？」

表情を伺うように上目使いで視線を向けて来る。小動物を思わせるその眼差しは、人間の本能的な庇護欲を否応なく呼び覚ます威力があった。

「ホンマや！好きなだけ頼んだらええねん！」

「……………良いの？」

さらに煽る霞の言葉に恋の小動物化が進行し、濤羅に向かって一直線に襲いかかって来る。

「嫌だと言つつもりですか！」

ねねも怒りを顕わにし、恋の小動物化も止まらない。隣の霞に目を向けるとにやついた笑顔で酒を楽しむばかりだった。

濤羅は覚悟を決めるより他なかった。

「……………好きに頼め」

瞬間、恋の顔に満面の笑顔が浮かび、瞳の輝きが五割ほど増したように感じた。

「店主、肉まん十個と餃子十皿、焼売も十人前、大至急です！」

「へい！」

ねねの大量の注文に店主が力一杯返事をした。濤羅はそれを聞いて余りの人外の量に目を見開くが、霞も恋も全く意に介しておらず、それが嫌がらせや誤注文ではないことが理解できてしまう。

むしろ。

「……………肉まんは後十個追加で」

「こっちも酒持ってこい！」

追加で注文をする始末だった。

## 華雄登場・弐（後書き）

ということまで第四話の2を投稿終了です。

説明長いね。でもオリルートだから……。もっと速く書けるようになりたいよう！ 董卓軍しかだせねえじゃん！ 好きだけど！

そんな感じでこれからも地道に亀足で更新を続けていく所存です。

てな訳で次回予告。

次回はついについにオリキャラが登場！ オリジナルヒロインが濤羅の前に現れスツタモンダで世紀末なラヴコメ展開が！ 月VSオリヒロインの仁義なき戦いが今始まる。次回『侵略者を撃て』、お楽しみに。

最後にここまで読んでくださった方に感謝を。お気に入り登録・評価をしてくださった方に愛を。

感想・批評・誤字報告お待ちしております。

君の心につ、ブウウスト・ファイヤアアアっ！！

華雄登場・参（前書き）

今回は自分にしては早めに書けたかなと……。それでも他より遅いですが……。

## 華雄登場・参

「……………美味しい」

恋は満足気に城への道を歩いている。その手には山の様な肉まん。店からお持ち帰りをした品だが、どこに入るのか不思議に思うほど店の中でも大量に胃袋に納めていた。濤羅が支出の多さに賈馱の説教を覚悟するほど。

だが笑顔が眩しいのは恋だけではない。

「もつと頼んでやれば良かったのです」

「いや、濤羅は、ホンマ男前やなあ！」

犬の張々に跨り颯爽と恋の横を進むねねと、やはりお持ち帰りの酒が入った瓢箪を呷る呂律の怪しい霞。

散々にたかられた濤羅の財布は羽毛の如き軽さへと変化を成し遂げ、月と賈馱の顔を脳裏に度々思い起こさせてしまう。

足取りは重くなるが止めることは叶わず、それは確実な終焉をもたらす。つまりは屋敷への帰還。四人の視界に月の屋敷の門が見えた。

「む？ 誰か居るのです」

ねねの言う通り、門の前には門番以外の人影が見てとれた。濤羅は猛烈な悪寒を感じ即時撤退が頭を過るが、その判断が問題の先送り以外の何物にも当たらないと理解している。諦観を持って溜息と共に前進を決行した。

「やっと帰って来たな」

「お、華雄やんか。どうしたんや？」

予感の中。

華雄は霞の問いに胸を張る。

「その男が外に出たと聞いてな。探しに行くよりここで待ち伏せの方が効率が良いと判断したのだ」

「華雄にしてはまともな判断なのです」

ねねは嫌味の籠った賞賛を送る。当然華雄も顔？こめるがさつさと無視を決め込んで瀟羅にその手の戦斧を向けた。

「さあ武器を取れ、勝負しろ。真剣勝負をな」

「……すまんが俺は」

「持ってて」

「れ、恋殿！」

何とか華雄を説得しようとする瀟羅を庇うように、肉まんをねねに預け恋が割って入った。瀟羅はその後ろ姿に闘気を感じ取る。

「何のつもりだ呂布」

「……瀟羅は恋が守る」

「ほう？ つまり、その男と戦うならばまずはお前を倒せというとか。面白い！」

「……恋は倒せない」

二人の闘気が爆発的に高まる。軍師のねねですら二人の間に立ち込める尋常ならざる空気を感じ取り顔を青くした。

「恋殿、華雄を倒すこと事態は構わないのですが、ここはまずいのです！」

「華雄も！ こんなところで何斧なんか構えとるんや！」

ねねと霞が必死で制止するが、二人の間にある空気は晴れることなく、むしろより激しく火花を散らし視線が衝突する。

瀟羅は覚悟を決めた。

「……解った、華雄。お前の挑戦を受ける」

『！』

その言葉に、一同が驚愕の反応を見せた。その中でも華雄だけは驚愕の中に歓喜を交え瀟羅に迫る。

「真か！」

「ああ。二言はない」

「ならば」

「ここは拙い。庭に行こう」

そう言って華雄の脇をすり抜け屋敷の中へと先行していく。真直

ぐに迷いなく庭へと進んでいく瀧羅を慌てて霞と恋が追い掛けてきた。

「ちょよ、ホンマにやるんか？」

「ああ」

霞に素気ない返事を返す瀧羅の頭には、既に華雄との闘いのことしかない。華雄を問答無用で納得させるだけのものでなければ、この申し出を受ける意味などないのだ。月の為にも、身内で揉めている場合ではない。

「……………瀧羅、きつと勝てない」

そう恋は不安そうに呟く。

瀧羅もそれ自体を否定することは出来ない。単純な身体能力では万全な状態であろうとも華雄に対しての勝ち目を持つていたなかった。だが、それが何だと言うのだ。元より内家の拳は肉体の限界を超える技術。内家拳の立ち合いにおいては勝敗を決する要素とならない。

瀧羅は無言で笑いかけ、恋の頭を撫でた。そこに込められた意図を恋もそれとなく理解している様で、不安気な表情を浮かべながらも、それ以上は何も言わなかった。

後ろでねねが『ボコボコにやられるがいいです』と密かに呟いたことは聞かなかったことにする。

辿り着いたのは馴染みの場所。瀧羅が月と出会い、霞と剣を交えた屋敷の庭。夕暮れを受けた赤い世界。

瀧羅は一度ゆっくりと呼吸をする。肺腑の中の淀んだ空気が吐き出され、清浄なものに入れ替わった。

「……………霞、剣を貸してくれ」

「……………？ 素手やないんか？」

「真剣、勝負だからな」

静かに握った自分の拳を瀧羅は見つめる。霞の疑問も解るが、この勝負は霞との手合わせと目的が違う。為すべきことは唯一つ。華雄を対等な条件で叩きのめすことだ。

「瀧羅のあの変な剣は詠が管理しとるから返してやれんで？」

「……構わん」

「うちの相棒も人に貸すのはお断りや」

「……………この間の剣で十分だ」

解りきつた答えを霞はしつこく返し結論を先延ばしにする。瀧羅も流石に焦れて語気が幾分か強くなってしまう。自分の時に武器を使われなかったことが相当不満の様だ。

だが、それでも瀧羅の体格に合った剣を持ってきてくれた。飾り気のない直刀は安全の為に刃を潰しているが、それでも骨を折る程度のことは造作もなくやつてのける硬度と重量を持っていた。剣の心得のない者では、振り回すことが精々だろう。

「でもええんか？ それ慣れてへんやろ？」

得物の具合を確かめる瀧羅に霞が問いかけた。武人としては尤もな疑問である。直刀と倭刀では全く別の武器なのだ。押しきることを主目的とした剣と、切り裂くことを主眼に置いた刀は、慣れ等という言葉では表せられない違いを持つ。倭刀の知識がない霞がそこまで解っているかは疑問だが、普通であれば致命的な差である。

「問題ない」

だが瀧羅はそう短く答えた。

元より瀧羅の修めた内家拳戴天流は得物を選ぶことがない。二八刀三六剣、しめて六四套路の戴天流刀剣法は刀剣いずれも対処できる。

十分な確認を終えた後、瀧羅は視線を上げる。そこには、己の武に対する絶対的な自信を隠そうともしない華雄がいた。

「準備はできたか？」

手に持つのは常と変らぬ大斧。武と人が合一の存在として瀧羅の前に立ちほだかるその姿、正に威風堂々と呼ぶに相応しい。

「二つ、誓え」

瀧羅が指を二本立て華雄に見せつけると、解ったと華雄は頷いた。  
「一つ、一手目から全力で来い」



その言葉に華雄は誇りと自信と怒りを込めて叫び返す。

「当り前だ！ この華Y、立ち合いで手など抜くものか！」

「二つ目……」

華雄の覇気を受け流し、瀧羅は二つ目の約束を提示する。

「どのような結果であれ、これ一度きりにしてもらおう」

「良いだろう。どんな条件であれ私が勝つ！」

斧を構え華雄は瀧羅に剥き出しの闘気を当てて来る。瀧羅の体が素直に闘気に反応して僅かに震えた。

周囲から音が消える。嵐の前の静けさだ。ここにいる誰もが、風や鳥でさえこれからの闘いの激しさを感じ取って無言になっている。瀧羅は静かに手にした剣を構える。戴天流『竜牙徹穿』。総身を弓弦に、さながら矢を引き絞るが如く剣柄を引いた構えだ。そこから繰り出される次の一手は唯一つ。

刺突。

「行くぞ！ 我が金剛爆斧の力を見よ！」

一直線に華雄は駆けだした。大斧を振りかぶり瀧羅を狙う。

間合いの広い大斧で、瀧羅の届かぬ距離から叩き潰す狙いが見えた。

間違いではない。華雄の膂力と武器の特質ならば小技など不要。力で押し切ることが最も効果的だ。例えばかわされても流れを掌握できる。

「はあああああああああああああああつ！」

振りかぶった斧を華雄は怒声と共に両手で力一杯握り込む。単純に考えれば片手で振るう斧の倍の威力。

先の約定通り、華雄の真の全力だ。

それに対して瀧羅は、

「疾っ！」

踏み込んだ。

脚力、重心、腱の動作、臓腑の拍動、血脈の流動、体内に起きる全ての『力』を『把握』し『同調』させた踏み込み。

それは常識という枠を遥かに凌駕した。

「……………」  
華雄は無言。

荒い呼吸だけが濤羅の耳に届く。

金剛爆斧を振りかぶった姿勢で華雄は制止していた。

喉元に突きつけられた刃は、濤羅にその制御を完全に掌握されている。

誰も何も口にしない。それは濤羅の剣への驚愕もあるだろうが、それ以上に今この瞬間、口を開くべき者は唯の一人でしかなく、を感じ取っていた。武人でないねねですら。

「……………」  
参った

長い沈黙の後、かすれる様な声で華雄が降参した。振りかぶったまま振り下ろすことも出来ない斧を手放す。斧は重力に引かれて地に落ちた。

濤羅はゆっくりと剣を退く。周囲の空気を感じ取りながらもそれに一切の興味を持つことなくその場を離れる。この結果は濤羅にとってみれば至極当然のものだった。内家剣士の力を外家の人間が量る事こそが愚の骨頂である。

「馬鹿な……一体何をしたのだ……？」

呆然としながら華雄は濤羅に問いかけた。それはこの場にいる誰もが持つ疑問だろう。証拠に霞も無言で濤羅の答えを待っている。

「てゆーか、絶対に何かしたのです！ ねねには何も見えなかったし！」

無理もない。武人としての功夫を積んでいないねねに、今の濤羅の動きを見切る目などあるはずがない。恐らく、眼前で見せつけられた華雄ですら正確に把握できてはいないだろう。距離を置いて全体を傍観していた恋と霞が辛うじて理解できている程度に違い。その二人ですら結論としての現象の認識が限界で、そこにある内家の深淵は見えぬ。

「……………」  
語る意味はない

手段云々以前に、その根底を支える思想が違う。言を尽くしたところで理解するのは難しい。連綿と受け継がれ研鑽されてきた内家の理論体系は長い時と功夫の末にのみしか学べない。

「意味がないだと？ ならばもう一度 ！」

「 あかん！ 約束したやろが！ 」

激昂しかかる華雄を霞が押し留める。

「 だが張遼！ 」

「 あんたかて解つとるやろ！ こんな試合、百度やったかて、百敗するだけや！ 」

「 そんなことは ！」

「 ある！ 」

一喝。

霞の叫びに華雄ですら息を呑んで固まってしまった。霞は小刻みに震えながら華雄の肩を抑え、真直ぐに瞳を見つめる。本人の自覚の有無は不明だが、華雄の肉に僅かだが指が食い込んでおり、それなりの力が込められているのが見てとれた。

「 …… うちらじゃ、勝てへんのか 」

「 張遼 …… 」

お互いが目を逸らす。共に己の武に対して矜持を持つ者同士、受け入れ難い現実への憤りや崩れていく自信に苦しんでいるのだろう。だが瀧羅はそんなことに興味はない。共感はできるが、二人がそれを求めていることは容易に感じられた。静かに剣を置き、黙ってその場を離れる。

「 …… 瀧羅、華雄より強い？ 」

後を追い掛けてきた恋が、不思議そうに問いかけて来た。

「 …… どう思う？ 」

「 …… 弱いけど、強い 」

素直な少女の反応に瀧羅は微笑む。瀧羅の見立てでは恋は華雄よりも数段上の強さを持っているが、強さに執着している様子がない。武に誇りを持つ二人よりも、武の価値を必要以上ノ欲していない恋

の実力が高いというのは、ある種皮肉であり真理であった。

「……………」

笑みの意味が解らずに首を傾げる恋の頭を、濤羅は優しく撫でた。  
「むー!」

怒りの籠った視線で我に振り返り慌てて手を引く。密かに何うと、噛みつかんばかりの表情を浮かべてねねが睨みつけていた。妹と接するかのように自然に撫でてしまったが、周囲に与える印象を考慮して行動すべきだったと反省。

その瞬間、内傷から滲み出た血が気管を駆け上る。僅か一手の立ち合いですら今の濤羅には命を賭けねばならないものだった。

恋達に気付かれぬよう、密かに血を呑み込んで表面に出すことを堪える。口の中に少々血の味が残るが無視して恋に話しかけた。

「部屋に戻る」

「……………」 解った

「れ、恋殿!」

「……………」 良い

ねねが濤羅に突っかかるうとするが、恋にそれを阻まれる。恋は濤羅の体の調子を野生の勘で感じ取っているようだった。

恋に内心で感謝を送りながら一人で部屋に戻る。月との約束を守るために、少しでも体を休めたかった。これ以上月を悲しませることも賈馱に迷惑をかけることも本意ではない。拾った命を月の為に月の傍にいる賈馱、恋、音々音、霞、華雄の為に使いたかった。だから今の濤羅にとっては休息こそが、最も必要。そう考えていた。

「……………」 遅かったわね

「部屋の前で待つ賈馱の姿を見るまで。」

「……………」 申し開きは?」

「恋の様に間のある賈馱の口調に濤羅は旋律を覚えた。」

「……………」 解ってるわよね?」

「濤羅は休息を諦めた。」

## 華雄登場・参（後書き）

ということまで四話の参が終了です！ どんどんばふ〜！  
霞の気さくさとか恋の可愛さとかまだまだ表現できてない自分の筆力が憎い！ 日々これ精進、心を磨く！ ってところですね。

そして遂に鬼哭街の非18禁版が販売！ もし拙作をよんで鬼哭街に興味を持たれた読者様が居られましたら（居たら良いな〜自惚れかな〜？）PCで出来ます。ぜひプレイしていただきたいです。  
恋姫も無印がPS2、真がPSPで発売中ですので、遊んでいたければさらに私の作品を楽しんでいただけると……。

ということまで恒例の次回予告！ 読んでないという意見を頂戴しながらも続けます。私、負けないっ！

黄巾党を打ち倒し訪れた平和も長くは続かなかった。靈帝の死を皮切りに激化する権力争い。中華に再び戦乱の兆しが現れた。

「十傑集が英雄本色、玩具で遊ぶは笑止千万！ 我に楯突く無法が者共、所業を背負えば現世に還る！ 聞けい！！盛者必衰！！ 命の鐘の響きあり！！」

命の鐘の十常侍が遂にその牙を向く。圧倒的な力で大怪球を従える十常侍に瀟羅は勝てるのか？ そして、華雄の命を懸けたビッグバンパンチが、今……。

次回「豪傑たちの黄昏〜勝利の鐘、未だ響かず〜」  
立てるか、孔濤羅？

嘘！

最後にここまで読んでくださった皆様に感謝を。感想をくださっ

た方に無常の愛を。以降も、感想・批評・誤字報告を随時受け付けておりますので、どうかよろしくお願ひします。

来週も、皆様の平和を、お世話します。

洛陽激動・壱（前書き）

今回難産だったなあ。

## 洛陽激動・巻

「少し、出かけない？」

ある日、常の如く自室で療養をしていた瀧羅の元へ苦い顔の賈馱を伴った月が訪ねてきた。要件があれば基本的に瀧羅の方が呼び出されることが常であり、また道理にかなっている。

「……俺は構わないが？」

月から三步下がって仏頂面で様子を窺う賈馱に、瀧羅は悟られないうよう視線を向けた。苦虫を噛み潰した様な顔で黙っている賈馱を見ていると、不承不承ながらも月の話を肯定していると読み取れのだが……。

「じゃあ、門で待つてるから。用意ができたら来て」

「……………ああ」

事ここに至っても、賈馱は無言を貫いている。普段ならば瀧羅に噛みついて然るべき場面であるにも関わらず、という状況が一抹の不安だが否と答える理由がなかった。

「……………さつさと来なさいよ」

不機嫌に釘をさして賈馱が退出していく。次いで月も部屋を出て行った。賈馱の一連の行動を消極的な肯定であると判断し、瀧羅は出かける用意を始める。

とは言え、準備自体にそれほど時間は必要なかった。ぼろぼろの衣類以外は持ち物などない。家具や生活用品は月からの支給品のみに、生来その手の事に興味の薄い瀧羅は着替えや準備などで手間取ったことはなかった。

月が瀧羅の持ち物に似せて作らせた黒の外套を纏うと自室を後にする。激しい太陽光が網膜を焼き、瀧羅は僅かに目を細めた。汚染物質を含まない純粹な光の清涼さが心地良く全身を温める。

「どうした、孔？」

日光を受けながら歩く瀧羅に声をかけて来た女がいた。



「華雄か」

「出かけるのか？」

「うむ。董卓様の護衛任務を仰せつかった」

「なら俺と同じだな」

「体調はどうだ？」

「……………まあな」

二人で連れだつて待ち合わせの門へと向かう。華雄はいつもの大斧ではなく剣を佩いていた。

以前の手合わせ以降、華雄は瀧羅との約定を守り勝負を仕掛けることはなかったが、毎日瀧羅の体を気遣うようになってしまった。

勿論好意からではなく再戦の機会を伺つてのことは明らかだが、それも好意の一種には違いない。瀧羅は毎回無難な否定で返していた。「そうか…………。さつさと治すんだな」

そう言つて華雄は瀧羅を置いて足を速める。瀧羅もそれに合わせて歩を進めるが、痛みを感じ自然と遅れてしまった。先を行く華雄との距離はみるみる開いていき、約束の門に着く頃には華雄は既に月達と共に瀧羅を待つている様子だ。賈馱と共に苛立っているのが見てとれた。

「……………！ 瀧羅」

「すまん、待たせた」

声をかけてきた月に頭を下げながら近寄る。月と賈馱はいつもの高級そうな布を使い装飾を施された衣装ではなく、精々裕福な商家の娘程度の装束に着替えていた。

瀧羅は後の二人の待ちくたびれた視線を受け流して門を押しあける。月が門番に会釈をして門をくぐり、賈馱と華雄もそれに続いた。それを見届けた後、瀧羅も後を追いかける。華雄と違い、月の速度に合わせることは苦にならなかった。

月は周囲をきよるきよると見渡して笑っている。少なくとも出会つてからの月は、瀧羅の知っている限り深窓の令嬢だった。何を思い立つてのことか知らないが、今日の様の外に出ていこうとしたこ

とは初めてで、賈馱も月を連れ出そうとしたことはなかったはずだ。実際に下っ端の一人でしかない濤羅ですら夜襲に遭う程、この洛陽が魔都と化している。賈馱が不用心に出歩くことを認めたことの方が異常だった。

街を見ながらも月と賈馱は足を止めることなく歩き続ける。既に行き先を決めているのだから、洛陽の街を歩いたことは数えるほどしかない濤羅は、黙って二人の後をついて行くしかなかった。

活気が足りない。濤羅は洛陽の通りを歩きながらそんな感想を持った。決して人が少ない訳ではない。だがどこか人々の動きに覇気がなく、表情も落ち込んでいる。

如何に月や賈馱が力を尽くしたとて為政者の根幹が変わる訳ではない。恐らくそれを人々は敏感に察し、未来への活力、希望を持ってずにいるのだろう。その毒の力は魔都『上海』の裏の顔であった濤羅には馴染みであり、その恐ろしさは身に染みて理解していた。

もしかという思いは正直あった。この世界は濤羅の知る歴史と様々な相違点を持つてゐる。武將が女である、董卓の立ち位置が違う、そして何より本来ありえないはずの孔濤羅という人間の存在があった。このまま三国志の流れが変わるかもしれないという淡い期待を持っていたのだ。

だが、市井の様子を見る限りそれはなさそうだった。漢王朝は近いうちにその歴史を閉ざすだろう。

暗澹とした思いで歩いていると、ある店の前で月と賈馱は足を止めた。

「……衣装屋か」

「うん。ここで今日は服を買おうと思って」

店内へと入っていくと実用性よりも見栄えを優先した数々の女性用衣装が陳列されていた。ある程度の金持ち御用達な店であるのだろう。どの服も安っぽさなど微塵もなかった。

月と賈馱は服の物色を始める。並んでいる商品を手に取ると体に当て、お互いに感想を言い合う。その姦しさに濤羅は驚きを禁じ得

ない。こういった状況には不慣れであった。

堪りかねて視線を外すと周囲を伺う華雄と目があう。

「お前は参加しないのか？」

「私はこんな動き難い服に興味はない」

何処までも武人な華雄の発言にらしさを感じて思わず微笑んでしまった。華雄はそんな濤羅の様子に激昂しかけるが、怒気を感じ取った濤羅は抑え込みに回る。

「すまん。馬鹿にしたつもりはないんだ」

「ふん！ 女らしさと無縁なことは自覚している！ だが私は武人だ。武に生き武に死す、それが武人というものだろう」

否定する要素は全くない。濤羅とて嘗ては剣に生きた者、状況が許すのであればそういった生き方への憧憬を抑えきれなかっただろう。華雄と濤羅の差は、ただ己の剣への思い以上のものがあつたかの違いにすぎない。

「ねえ、濤羅」

「ちよつ！ 止めてよ月！」

華雄と話している濤羅の下に月が駆け寄って来た。その後ろには隠れるようにしながら手を取られ引きずられるような賈馱。

「こんな格好、僕には似合わないって！」

「も〜、詠ちゃんそんなこと言つて。とつても似合ってるのに。ほら」

そう言つて賈馱の後ろに回り込んだ月がその背中を軽く押すと、賈馱は思わず数歩前によろけてしまう。

賈馱は店に来るまで来ていた服ではなく試着したであろう衣装を身に纏い、頬を染め腕で少しでも体を隠そうと全身をくねらる。美しさより愛らしさを、女性らしさより女の子らしさ強調した服は世辞抜きで賈馱に良く似合っていた。賈馱が動くたびに飾り布が揺れ少女の可憐さが強調される。

「どつ、濤羅？」

「似合っている」

「~~~~~」

「瀧羅の言葉に賈馱の顔がさらに赤みを増し、瀧羅にまで熱が伝わって来るような気がした。」

「ふむ、いつもと全く雰囲気が違うな」

「う、うるさ~~~~い！」

賈馱の羞恥心の限界に華雄の言葉で到達した。店内にも関わらず大声を上げて叫ぶと、眉根を釣り上げ試着室へと戻っていく。

「もう、詠ちゃんってば」

「着慣れてないんだろっ」

「もう、瀧羅ってば」

嘆息の矛先が突然賈馱から瀧羅へと向きを変えられた。月が何を呆れているのか思い当らない瀧羅は困惑するしかない。だが月は僅かだが非難の感情を込めた声を出す。

「詠ちゃんは恥ずかしくつてるだけじゃないんだよ？」

「？」

益々混乱する瀧羅だった。

「詠ちゃんはね、照れてるの」

「……………誉められて、か？」

「瀧羅に、誉められて」

瀧羅の名を強調する月の言葉に瀧羅は当惑を極める。月の言い分では賈馱が瀧羅に少なからず好意を寄せていることになる。だがそんな心当たりは瀧羅にはない。元々それ程交流がある人物ではなく、月の隣で柳眉を逆立てている姿が最も馴染み深いのだ。嫌悪を持たれていないだけでも御の字というもの。好意に繋がる意味が解らない。そしてそう言う月の考えは尚理解に届かない。

瀧羅は女子の複雑怪奇さに目眩を覚えるしかなかった。

「……………そうか」

「違うから！ 絶対じゃないから！」

声と身振りで全力を持って否定しながら賈馱が駆けつけて来た。

瀧羅から見れば驚異的な速度での帰還。おまけに離れた場所での月

との会話まで耳に挿んでいるらしい。

「で、買う物は決まったのか？」

あまり考え込むのも性に合わぬと濤羅は次の行動に移った。ある種逃避ではあるが、男女の機微など悟れるものでもない。本人が違うと言っているのであればそうである。濤羅はそう結論付けた。

「えっと」

「董卓様！ 賈馱様！」

突如店に飛び込んでくる兵士。身に纏った鎧から見ても月の軍の間だ。兵士は息を切らせ、額の汗を拭う。如何にも火急の用といった風だ。

「何？」

賈馱の声に緊張感が含まれ、表情が軍師のものへと一瞬にして変じた。月と華雄も兵士に視線を集める。

「は！ 朝廷よりの使者が来られ、董卓様に急ぎ参内せよとのこと！ 現在張遼様と陳宮様が使者殿をもてなしておられます！」

跪き報告する兵士の言葉に誰もが息を呑む。これ程緊急を要する招集を受けたことは濤羅が知る限りなかった。いったい何が起きたのか？ それを想像する時間はない。

「解った、すぐ戻る！ 華雄は護衛を！ 濤羅は一人で帰ってきて！」

即座に行動を決定し賈馱は指示を飛ばす。濤羅と華雄は頷くが、月は濤羅の方を見て躊躇いの感情を浮かべた。濤羅を一人置いて行くことに不安があるのだろう。しかし、一刻もおしいこの状況では濤羅は足手まといにしなければならない。それは濤羅自身がよく理解していた。

兵士の手前、あまり馴れ馴れしくするのもどうかと思い、月の眼を真直ぐ見て無言で頷くと、月はそれで理解したらしい。一つ深く頷き返すと、賈馱達を引き連れて店を飛び出した。

次いで濤羅も店を出る。既に月達は通りの人の波に吞まれ姿を見ることができない。

元々月達の付き合いで出て来ただけの瀧羅にこれ以上街に居る予定などないので、さっさと屋敷に戻ることにする。

様々な店が軒を連ねる通り。売り子の声が響く街を瀧羅は一人来たときと逆に歩いて行く。如何に活気がなくとも人が生きて生活をしているだけで街は動き、その活動を止めることはない。少なくとも人と瀧羅はすれ違った。

「……………元気そうだな、『紫電掌』よ」

それは誰も知らぬな。上海に置いてきた瀧羅の二つ名。瀧羅の修めた戴天流の秘奥義。

それをすれ違い様に何者かが囁いた。

瀧羅は瞬時にふり返る。僅か数歩離れた場所に悠然と佇む男が目に入った。氷の様に冷たく、相手の心の底まで見透かす瞳。酷薄なそれでいて柔和な微笑。そんな男だった。

「何故……………お前が……………」

「はは、久しいな孔瀧羅。いや、お前がマカオから戻るまでに比べれば束の間か」

忘れるはずがない、忘れられるはずがない。

瀧羅を裏切り、瀧羅を苦しめ、瀧羅を壊し、瀧羅を殺した、瀧羅が殺した男。名は、

「劉豪軍！」

人呼んで『鬼眼麗人』。

「お前は、死んだはずだ！」

瀧羅の電磁発頸は、最後の『紫電掌』は豪軍の命を確実に断つていたはずだ。その豪軍が何故ここに立っている？

豪軍は瀧羅の叫びなどどこ吹く風と受け流し、僅かな動揺もない。逆に瀧羅に冷笑を返すほどだった。

「それはお前も同じはずだろう、瀧羅。確かに俺は死んだ。だがお前はここにいる。お前は死ななかつたからか？ ……馬鹿な。内傷、外傷共に致命傷に至っていた。奇跡などで覆せる死だったのか？」

答えることは出来なかった。自身の生を濤羅は確かに信じる事が出来ずにいる。目を閉じればそのまま二度と開くことはないのではないかという疑念が常に纏わりついていた。

濤羅の葛藤に興味を見せず豪軍は語り続ける。

「俺もお前も屍だ。屍が現世に止まることなどできん。いつまでこの茶番を」

「……………」

「鬼は地獄へ戻るんだな」

「……………」断る！

濤羅は豪軍の鬼眼を睨み返した。憎悪ではなく、目の前に立ちただかる壁として。

「例え貴様の言葉が正しいとしても、俺はやらねばならないことがある！」

「あの、月という少女か？」

「そうだ！」

この男の前に隠し事など意味がない。何故月の事を知っているのか問うても意味がない。相対する人間の心を見透かす鬼眼の前に、濤羅が小細工などしたところで無駄なのだ。

だからこそ、濤羅は心の限り叫ぶ。

「俺はあいつとの誓いを反故にはしない！」

「今度こそ、か。愚かな。復讐にその身を焼き、仁も義も、人としての全てを捨て去って力を求めた者が、今更小賢しく人間の徳を解くとはな」

「それでも、俺は今の俺を認めた月の闘う！」

「瑞麗の代わりにか？」

濤羅の最愛の妹、孔瑞麗。濤羅を兄に持ってしまったが為に地獄を見てしまった事实は、濤羅の心を抉り巨大な穴を開けていた。

「お前は月を瑞麗と同じにするのか？」

「違う！ 同じにしたくないからだ！」

濤羅の脳裏に月の顔が浮かぶ。初めて会ったあの月の夜、月の愁

いを帯びた瞳を瀟羅は忘れられなかった。愁傷を埋める欠片を探し求めていた桃園であった瑞麗の欠片と重なった。自分の願いの為に周りが苦しみ、その苦痛から孤独な檻に自分を追いこんでしまった月を放っておけなかった。

「月は瑞麗とは違う！ 違う未来を歩ませる！」

初めて豪軍が黙った。

短い沈黙。

「……………修羅道から外れるか、剣鬼が」

「……………」

「下らん喜劇に過ぎんが、舞台に立つ以上お前は役があるか…………。ならば客席でゆっくりと拝見させてもらおう」

「豪軍…………」

「ちよつと兄ちゃん！」

突如呼びかける声。思わずそちらに顔を向けると声の主が瀟羅を睨んでいた。筋肉質の中年男性が貴金属の装飾品を並べ売っている。

「そんな所に一人で突っ立ってたら商売の邪魔だ！」

「一人…………？」

視線を戻すと、先程までの場所に劉豪軍の姿はなかった。今までの会話もまるで白昼夢の様にあやふやな感覚へ変わってしまった。

「なあ、なんか買うのか？ でなきゃさっさとそこ退いてくれ」

「ああ、すま」

……………蕭。

鈴の音が聞こえた。

……………蕭。

鈴の音に導かれ視線を移すと、一つの腕輪が目に着いた。繊細な彫り物がされた銀の腕輪。飾りとして付けられた鈴にさえ気品のあつる明らかな名工の一品だった。

「……………ああ、そいつは今日仕入れた一品でな。急に金がいるからつて馬鹿みたいに安い値段で売りつけられた代物だ。と言っても安か



ねえがな」

腕輪を手に取る。恐怖さえ覚えるほど濤羅の知る腕輪によく似ていた。運命か必然か。腕輪越しに瑞麗の顔が見えた。

「……………これを売ってくれないか？」

「金はあるのか？」

「……………持ち合わせは、ない」

「じゃあ駄目だ」

男は濤羅を追い払おうとその手から腕輪を取り返そうとする。まるで奪われるような思いを濤羅は抱いた。

「……………後払いでは駄目か？」

「駄目駄目！ 顔洗って出直しな！」

「……………では、董卓の屋敷に取りに来てくれ」

「と、董卓？ お前、董卓様の関係者か？」

「……………ああ」

心苦しいが月の名を使わせてもらう。それ程濤羅は腕輪を手放したくなかった。

「うっっん、いくら董卓様の所の人と言っても……………」

「頼む。売ってくれば倍払おう」

「倍……………」

男の心が動いたのが解った。濤羅は最後の一押しをする。

「腕輪程ではないが、これだけ置いて行こう。俺の所持金の全てだ」

濤羅は男に金を握らせる。その額はその日の売り上げとしては十分すぎるほどの額。前回の反省を踏まえ、奢らされる可能性を考えて必要以上に多目に持ってきていたおかげだった。

「ん~~~~~、良いだろう。持っていきな！」

「すまん」

腕輪を渡される。濤羅はそれを慎重に懐へとしまい、男に別れを告げ屋敷への道を歩き始めた。

……………蕭。

懐で鈴が鳴った。



## 洛陽激動・弐（前書き）

お待たせしました、第五話の二です。五話はこれで終了。

## 洛陽激動・貳

時間が経ち、天頂に在った太陽も山の陰にその姿を隠し始め世界が赤く染まり始める時、濤羅は月の屋敷の庭で唸り声を上げていた。原因は昏間に購入した腕輪だ。

衝動的ではあったが自身では譲ることのできない感情に従っての行動に後悔はなかったのだが、その仮定は後悔に後悔を重ねても足りないものだった。

支払う金がないのである。

そもそもこの時代の通過など持っていない濤羅が使えるのは、月が用立ててくれた少なからぬ金であった。賈馱の不満を受け流しながら貰った金は、残念なことに恋達の食費の支払いと今日の前金で全て出尽くしてしまった。これ以上は肉まんの一つすら買うことはできない。だが明日には店の男が金を受け取りにやってきてしまう。そうなれば賈馱が激昂するばかりか、月に迷惑をかけてしまう。そればかりは避けたい。

濤羅の進退はここに極まった。

「な〜んか陰気な顔の奴がいるのです」

「……………どうかした？」

頭を抱える濤羅に声をかけたのは恋とねねだった。二人は庭で立ち尽くす濤羅の様子に違和感を持ったのか、不思議そうな顔でこちらを見つめていた。

「……………」

ふと、ある案が浮かぶ。あまりに恥知らずでもあるし、甲斐性なしで計画性のなさを詰られそうな気がするが他に手もない。濤羅は思い切って胸の内を晒してみることにした。

「……………金を、貸してもらえないか？」

無言。

無理もないと濤羅は思う。立ち場が逆であればその厚顔無恥さに

濤羅も絶句していただろう。

だが手段を選ぶ余地はなかった。現状は切羽詰まっている。既に屍に等しい濤羅を生かしてくれた月の為であるのなら、死体の面目等どれ程の価値があるうか。

そう自分に言い聞かせ、濤羅は再び頭を下げる。

「……金を貸してくれ」

「……………いい」

恋がこくりと頷いた。ここは本来であれば感謝すべきところであろうが、それ以上に驚きが先行してしまう。

「……………いいのか？」

「……………濤羅、困ってる」

その言葉に濤羅は己の不甲斐なさを再認識させられ、自尊心を大きく抉り取られる。まだ少女と言っても過言ではない恋から借金をするなどあまりにも一般観念的な「大人」として情けなかった。

しかし残念ながら、この状況は濤羅自身が望んだものだ。それがどれ程納得いかに受け入れ難い事でも、濤羅には縊るしか手はない。

「駄目なのです、恋殿！」

そんな濤羅の葛藤に決着を付けたのはねねだった。ねねは恋に向けて毅然とした態度を取った。

「……………ねね」

「……………うゝ、そんな悲しい顔をされても駄目なのです」

ねねは困りながらも珍しくはつきりと恋の言葉に対して否定の立場を取る。否定そのものは少なくはないのだが、その際は大概濤羅の方に非がある体をとって感情的に捲し立てていた。それが今回は恋のおねだりを撥ね退け、沈痛な面持ちを浮かべつつも決して屈さない。

濤羅は恋からの借金は諦めた。

「もうお金がないのです。動物達の餌代が上がってしまって家計は火の車なのです」

「……………全然？」

「全然なのです。はあ〜……………」  
そのあまりに深いため息に恋は申し訳なさそうに頂垂れる。元々無理を言ったはずの濤羅の方が罪悪感に駆られてしまう。

「俺が無茶だったんだ、気にするな」

「……………うん」

濤羅の慰めの言葉に恋が頷いて答えた。

確かに政の乱れから行商の流れが滞り物価が高騰していると賈馱がボヤっていたのは聞いていたが、それが將軍である恋達の家計にまで影響を与えるほど悪化しているとは思わなかった。

動乱の兆しの様に濤羅には思えて仕方なかった。

「あれ？ あんたらこんなところで何しとるん？」

そこに霞が通りかかった。訓練上がりなのか額に汗を輝かせ槍をその手に持っていた。

「……………霞、お願いが、ある」

「お？ 恋から頼み事とは珍しいなあ。ええで、うちで聞けることやったらなあ？」

霞は楽しそうに恋に笑いかける。対して恋は真直ぐに頭を下げた。

「恋殿！」

「恋？」

濤羅もねねも、頭を下げられた霞もその行動に度肝を抜かれる。

だが恋は周囲の反応など一切気にせず腰を折ったまま霞に言葉を続けた。

「……………お金、貸してほしい」

「は？」

全く事情を理解していない霞はポカンと大口を開けて目を点にする。ねねは大汗をかきながら狼狽し、濤羅も状況に思考がついて行かなかった。

「……………濤羅、お金がいる。でも恋手伝えない」

「……………あ、ああ。そういうことなら……………」

呆然としながら霞がとりあえず頷いた。その様子を見て濤羅は叶うなら数分前の自分を斬り殺したくなる。恋に恥をかかせる必要などなかった。そんな意識はなかった。だが現実はどうだ。

「すまん、霞。俺に金を貸してくれ」

恋の隣で濤羅は頭を下げた。

恨めしく思う。いつたい何度自分の為に人を傷付けるのか。あの奔放な恋が正しい所作で頼みごとをする。どれ程濤羅を恋が気にしているかの証に他ならない。

「頼む、霞」

「……………」

無言で恋と濤羅を霞は何度も見比べた。そして深く深く溜息をつく。

「はあ……、しゃあないな」

霞の思い一言に恋は反射的に顔を上げた。

「…………… 本当？」

「ホンマやホンマ。恋に頭下げられたら仕方ないやろ」

そう言って頭を下げ続ける濤羅の肩を持ち上体を起こし、耳元に口を近づけて囁いた。

「貸しーやで？」

「…………… 感謝する。どう返せばいい？」

「ん……、体治ったら本気の一騎打ちはどうや？」

まさか華雄の様な要求を突きつけられるとは思わなかったが、濤羅にとつては恋に頭を下げさせてまでの申し出だ。断ることなどできるはずがなかった。

「で？ いくらいるんや？ 今すぐか？」

「…………… 明日までに、これだけだ」

指を開いて額を提示すると霞はゲツと再び目を見開いた。視線で何度も本当かと問いかけてくるので無言で頷き返すと、霞は脱力し乾いた笑いを浮かべるのだった。

「…………… 良かった」

「情けない奴なのです」

恋とねねの感想を聞き流し、霞にもう一度頭を下げる。霞はこれ以上必要ないと手をひらひらと振ったが……。

「お前達、こんなところで何をしている？」

そこに新たな乱入者が現れた。

「華雄？ 董卓様の護衛で宮中に付いて行ったんじゃないのですか？」

ねねの問いに華雄は首を傾げる。

「そうなのだが……」

華雄はその視線を背後に向けた。自然、全員の眼が華雄の後ろに集まる。そこにいたのは、賈馱だった。濤羅をしてもその存在を感じることができなかった賈馱は、幽鬼のように生気のない姿を濤羅達に晒している。そこには濤羅を怒鳴り付けた覇気は欠片もなく、今にも消え去りそうなほど弱々しい。

「……………詠、変？」

全員が思う一言を恋が代弁した。だがそれに賈馱は答ええない。青い顔で唇を震わせ、何かにじっと耐えている。濤羅にはそう映った。「ずっとこの調子なのだ。董卓様を置いて一人で戻ってきてからなら賈馱つちが月を置いてきた？」

想定範囲をはるかに超えた華雄の答えに霞だけでなくその場に居る全員が驚愕を禁じ得なかった。この館に出入りする者で、賈馱が如何に月を大事にしていたか知らない者はいない。その賈馱が月を宮中に置きざり、況してや一人残して戻って来るなど。

「……………」

誰もがお互いの顔を見て黙り込む。今の賈馱が如何に異常な状態かを理解するが故に、真実を問い質すことができずにいるのだ。皆、自分以外が一步踏み込むことを期待している。

だが、それでは前進しない。恋は心配顔で、ねねは状況に首を捻り、霞は憂鬱そうな表情で、華雄は躊躇いを隠せてもいない。

濤羅は覚悟を決めた。



「……………何があった？」

その問いかけに賈馱は力無く項垂れて答えない。尋常ならざる事態であると誰もが感じながら、故にこそ誰もが動けない状態。

どれ程そんな時間が続いたのか。長かったのか短かったのか。瀟羅には解らない。唯賈馱の言葉を待ち、賈馱の拳動に注視する。

「……………月が」

絞る出すように賈馱がとうとう口を開いた。苦痛なのだろう、目に滲み出る涙が痛々しく眼を逸らす衝動を瀟羅に呼び起こした。勿論、そんなことができるわけがない。真直ぐと賈馱を見据え続きを待った。

「……………拉致された」

「……………何だと？」

あまりに予想外の言葉。全員が信じられねとばかりに目を見開く。賈馱はその視線から逃れるようにさらに顔を伏せ小さくなった。怒りに震え華雄が吠える。

「……………誰だ、董卓様にそんなことを！」

「……………十常侍よ」

賈馱は宮中で起こった一連の出来事をぼつぼつと語り始めた。

「……………僕達が呼び出された理由は皇帝陛下が崩御されたからだった」

瀟羅の脳裏に、一度だけ会った皇帝の顔が走った。全てを諦観した様な硝子の如き空ろな眼を忘れることができない。そして、依頼されたことも。

そんな瀟羅の思考な余所に賈馱は話を続ける。

「……………呼び出されたのは僕達だけじゃなく、華雄將軍も呼び出されていたの。時勢を鑑みて新たな皇帝を選定し即位させなければならぬから、その話し合いをすると……………。密かに十常侍は劉弁殿下、何進將軍は劉協殿下をそれぞれ次期皇帝へと推挙していたから今日で権力争いに決着がつくだらうと予想はしていたの」

そこで賈馱は、とうとう耐えきれなくなり大粒の涙を流し始めた。

賈馱が落ち着くまで誰も口を開かない、開けない。

しゃくり上げながら賈馱は何とか嗚咽を抑えた。涙は絶えず流れ続けているがそれでも話を再開する。とても痛々しかった。

「……でも十常侍は直接的な手段に出て来たの。僕達が参内したとき、既に何進將軍は……」

「……殺されてた」

「そんな……。陛下が崩御されたばかりの、しかも宮中で暗殺など……」

恋とねねの驚きの言葉に、賈馱は無言で頷いた。

「……瞬間に僕と月も取り押さえられたの。十常侍は言ったわ、これからは自分達に従え、できないときは」

「月を殺す、か？」

「ふざけとるな」

自然、濤羅と霞の声が低く重いものになる。抑えようのない怒りが十常侍に対して湧き上がる脳を焼いた。そしてそれは二人だけではなく……。

「何という事だ！ 今すぐ十常侍どもを叩き斬ってくれる！」

「……って何アホぬかしとんねん！」

暴走を始めた華雄を霞が抑え込んだ。

「放せ張遼！ 主を人質に取られて大人しくしていられるか！」

「阿呆！ そんなことしてみい！ 月が即行で殺されてまうわ！」

「その前に助け出せば問題あるまい！」

「できる訳ないやろ！ できるんやったら詠がただ泣とるわけないやろ！」

「そ、それは……」

「……詠の気持ちも解つたり」

大人しくなつた華雄を霞は解放する。誰もできることが解らない。恋やねねも不安の目で賈馱を見つめるばかりだった。

沈黙が場を支配する。誰もが己の無力さとこれからへの不安に押しつぶされそうになっていた。今までは十常侍と何進の権力争いの

隙間を突く形である程度上手く回っていた。それが薄氷の上だったことを自覚させられる。

「……指示は後で出すから今日は皆帰って」

空気に耐えかねたのか、賈馱は誰とも視線を合わさず、そう告げると場を後にした。返事すら出来ずに呆然と見送る五人。お互いに一度だけ視線を合わせると気まずく目を逸らしてしまった。

……蕭。

懐にある鈴の音が濤羅の耳に届いた気がした。

その音に押されるように濤羅はその場から駆けだす。

誰かが何かを言ったかのような気もするが、気に掛ける余裕はなく濤羅は賈馱を追い掛けた。

「賈馱！」

その背中に追いついた。

「………濤羅」

振り返る賈馱の顔に気はなく、その弱々しさに濤羅の胸は引き裂かれる。こんな賈馱は見たくはなかった。その思いが濤羅の口をこじ開けと外へ溢れ出る。

「………月は必ず助ける」

「………どうやってよ？」

濤羅の言葉を賈馱は即座に否定する。だが濤羅にそんなことは関係なかった。

「………方法は解らない。だが、必ず機会がある」

「………だから、それは何時だつて言ってるの！」

涙は怒りに変わる。矛先を向けられるのは堪らないが、悲しみに暮れる賈馱を見るよりは遥かにマシであった。

睨みつかる賈馱の肩を抑え、腰を落として視線を同じ高さに合わせて。真直ぐに、初めて見据える賈馱の瞳に濤羅は思いの丈をぶつける。

「………たぶん、俺はこのときの為に天から遣わされたんだ」

「天？」

「靈帝が言っていた。俺は天の御遣いだ。眉唾だと思っただけが仮に真実とするならそれは、月を助けるため」

間違いかもしれない、思い込みかもしれない。根拠などありはしない言葉で濤羅は力強く断言した。ただそれが真実であることを祈って、それが賈馱に希望を与えてくれると信じて。

だが賈馱は、濤羅の手を払いのけ、背を向けて再び歩き始めた。背中を小刻みに震わせて……。

「賈馱！」

「ついてこないで！」

強い言葉に濤羅の体は咄嗟に固まる。

「賈馱……」

「……言っただけには、やって見せなさいよ」

そう告げると振り返ることなく去って行った。

多少は信じて貰えたのだろうか。賈馱にしか解らないことを濤羅は自問した。答えは明白。賈馱に宣言したことを守る、それ以外に必要なことなどありはしないのだ。

外套の上から懐にしまった腕輪を撫でる。今はまだ、時期ではない。この腕輪が相応しいものに渡る時を、唯待つ雌伏の時だ。

……蕭。

鈴の音が静かに響く。

動乱が産声を上げた。

## 洛陽激動・弐（後書き）

第五話の二終了！ 今回は短めです。なんでこんなに時間かかったと言わないでください、猛省中です。

そして、評価300p突破やほおおおおお！！ て前回もやったなごういうの。でも嬉しいからまだやります。やほおおおおおおおお！！

これも拙作を読んで下さる皆様の応援あってこそこのもの。本当に感謝してもし足りません。ありがとうございます。これからも精進していきますので、よろしくお願いしまう。

さて、恒例の次回予告。捕らわれた月を濤羅は救出に向かう。しかし、洛陽の街は十常侍の魔法でブロックにされた人々や呼び出された栗とか亀とかのモンスターで溢れかえっていた。濤羅はドーピング茸やら大食い恐竜とか使って十常侍に迫る。次回「最強の配管工」お楽しみに。

元ネタ伝わるかな？

最後に、ここまで読んで下さった方々に無上の感謝を、お気に入り登録して下さいました方々に愛を。感想・批評・誤字報告等随時お待ちしております。では、今回はこれで失礼。

かつとピングだ、オレ！！

反董卓連合（前書き）

遅くなってもうしわけありません。

## 反董卓連合

月が十常侍の手に落ちてどれ程の日数が過ぎ去ったかを濤羅は正確に理解していない。一週間か一月か、それ以上かそれ以下か。唯時を待ち続けるだけしかできない濤羅は、齒噛みをしながら待ち続けるのみで、その長さへの関心など一欠片も持ち合わせていなかった。その余裕がなかったということも勿論ある。だがそれを遙かに上回る焦燥が余計な思考を奪い去っていた。

それは他の人間にしても同じだろう。特に賈馱は、唯日々の仕事に邁進することで不安を払おうと必死だった。あまりに痛々しい姿に屋敷の者は皆、大なり小なりの影響を受けている。恋は仕事から逃げなくなり、ねねは『ちんきゅーきつく』を減らしていた。霞の酒量も増え、あの鈍感な華雄ですら、賈馱に話しかけるのを躊躇っている。

だが世相は怒涛の如く皆を呑みこんで唸りをあげた。宦官の横暴は留まるところを知らず、現皇帝にそれを止める力はない。洛陽の街は日に日に衰えていき、人々の生活は困窮を極めた。だがそれは全て董卓の専横と人々の間で広まる。以前の董卓を知る洛陽の民はともかく、外の人間が事情など知るはずがない。董卓の悪評は飛ぶが如く中華を駆け巡って行った。

今の中華に月の味方は、月の屋敷にいる者達だけ。

そんな暗澹とした日々の中、賈馱が主要な面子を突如集めた。

「なんやの？」

霞が溜息を吐く。集められたのは霞、恋、ねね、華雄、そして濤羅。誰もがどこか表情に影を落としていた。尤も主催の賈馱が一番暗い表情をしているので、誰も不満が言えるはずがなかった。

「皆に聞いてほしいことがあるの」

賈馱は懐から折畳まれた一枚の紙を取り出すと霞に手渡した。紙を広げた霞の手元を覗きこむとそこには文字が並んでいる。その内

容は。

「何だとおおおおおおおおおおおおっ！」

「何ですとおおおおおおおおおおっ！」

華雄とねねが叫び声を上げるようなものだった。

「……………ねね、静かにしないと、駄目」

「華雄も耳元で叫ぶんやない」

即座に恋と霞が注意したが。

だが内容は二人が叫ぶのも理解できるものであった。

「反董卓連合軍、か」

濤羅が呟いた言葉は紙片の要約だ。それは各諸侯に当てた檄文だった。洛陽で権力を独占し圧政を敷いて民を苦しめる董卓を漢王朝に代して打ち砕かんという呼掛け。発起人は袁本初、三国志でも有名な武将である。

力のある諸侯の檄文はそれだけで力を持ち真実味を増す。さらに濤羅のみが知ることではあるが史実通りの展開でもあった。この事件を切っ掛けに朝廷の権威は地に落ち、俗に言う群雄割拠の時代へと突入していく。

「帝から反乱軍鎮圧の命が下されているわ」

「反乱か……………。はんっ！ 月の名前使おて好き勝手やっつた十常侍にとつちや、確かに反乱やな！」

不満を隠そうともせず霞は毒づく。我欲を満たさんとした連中のしわ寄せを一身に受けるのだ、それも仕方ない。この場にいる誰もが理不尽さのあまり爆発しそうになる感情を押し留めていた。

……………いや、二人ほど怒りを抑えきれない者が。

「董卓様さえ捕らわれの身でなければこんなことには！」

「全くなのです！ 呂奉先の武勇をあんなゴミ虫どもの為に振るわなければならぬなんて！ 恋殿、おいたわしやなのです！」

感情に關のない華雄と未熟軍師のねねは不満を隠すことなく垂れ流す。その動機には濤羅も共感するのだが、その結果としての行為に同意してはやれなかった。二人が吐いた言葉が誰を傷付けるのか



を理解しているからだ。

「アホ華雄！」

「……………ねね」

霞と恋はお互いの相方の頭を叩いて制止する。だが時既に遅く、賈馱の表情はさらに深く苦いものになっていった。そこで漸く二人、華雄とねねは自分達がどんなことを言ってしまったのかを悟ったらしい。ばつの悪い顔で賈馱から眼を逸らし、こっそりと表情を伺い始めた。何をしても分かりやすい連中だと濤羅は再認識をする。

「……………それで賈馱、対応はどうするんだ？」

「華雄、張遼を？水関に。呂布と陳宮は虎牢関に配する」

既にその優秀な頭脳を持って対策を立てていたのである。賈馱は淀みなくこれからの計画を披露していく。それは董卓軍を統率する軍師としての威厳を十分に示すものだった。

軍を率いることなど不可能な一兵卒にすぎない濤羅はその様子をしっかりと見守る、賈馱の雄姿をしっかりとその両眼にここにいることのできなかつた月の分まで刻みつけんと。

「全員に敵命しておくけど、絶対にこちらから仕掛けないで！ 籠城に徹するの！」

「何を言っているんだ賈馱！ 敵を叩き潰してこそその武であろう！」

「彼我戦力差を考えなさい、馬鹿！」

「ば、馬鹿だと！ 如何に敵が多くとも初戦は烏合の衆！ それを相手に城に籠るなど賈馱こそ臆病のものであろう！」

「だからこそ！ 烏合の衆だからこそ、時間経てば勝手に内輪もめを初めて自滅していくのは自明の理なんだってば！」

策より力を重んじる華雄が賈馱に噛みついてはいるが、すぐに決着を迎えるだろう。こと戦術戦略面においては賈馱と華雄を比べることが既に間違っている。濤羅よりも長い付き合いの連中は何処で霞が華雄を止めに入るかを伺っている状態だった。

「はあ……………」

霞が深い溜息を吐いた。全員から華雄のお守役と認識していることに気付いたのだろう。だがそれでも他に適任者はいないのもまた事実。賈馱は洛陽を動く訳にはいかないし、恋では会話が成立するかも怪しい。かといってねねでは華雄と同じ次元での罵り合いになつてしまい多大な時間の浪費となるのは目に見えている。結局どうあつて霞が手綱を握るしかないのであつた。

「ほら華雄。命令や言うてんやから大人しゅう従い」

「しかし張遼」

「はいはい、愚痴なら後で聞く。だからさっさと出陣の準備するでこんなことしとる間に、こちらが着く前に？水関抜けられとつたりしたら笑いもんやで」

華雄を引きずり霞は退出していった。その後恋とねねも続く。部屋には賈馱と濤羅だけが残され、遠くに華雄の喚き声が響くだけとなつた。

「何？」

濤羅を睨みつけ、暗に退出を促す賈馱の顔には常に向けられる怒り以外のものが隠れていた。

だからこそ濤羅は一人この場に止まり続ける。誰もが己に割り当てられた仕事を果たさなければならず、お互いに干渉する余裕のないこの状況だからこそ、唯一人、一切の楔を持たない濤羅だからこそこの場にいることができた。

「……………月は必ず助け出す」

たった一言だけ告げた。濤羅にはそれで事足りたし賈馱が多くの言葉を望んでいるとは思えない。この言葉に万感の思いを込め、短くも確かな決意を表す。

「……………何？ 気休めのつもり？」

悪態をつく賈馱のそれが本心でないことは濤羅には即座に理解できた。声を震わせ眼を逸らす、普段の賈馱であれば考えられない様子があつたからだ。

この濤羅の眼前に立つ少女は弱くもなければ愚かでもない。自身

の異常さも瀧羅の意志も誤りなく理解しているに違いなく、それでも誰かに鳴きつくことができない気丈な少女であった。

そんな少女だからこそ、そんな少女を従える少女がいるからこそ、生き恥を晒してなお剣を振るうと瀧羅は誓ったのだ。

「……救ってみせる」

だからこそその確認作業。あの月光の中少女に誓った思いが変わらぬことを伝えるために。

瀧羅は他に一言も零すことなく部屋を退出する。もはやこの場にいる意味はなかった。

他は知らぬ事だがこれからの中華に巻き起こる流れは大まかに理解している。細部こそ違っているが時勢の流れは史実を逸脱することなくここまで来ている。このままいけば董卓軍の敗北、そして群雄割拠の戦国時代。その中で瀧羅は歴史に対して挑まなければならぬ。それができるのはただ一人この時代に本来存在しない自分だけだと理解していた。故にこそその決意である。

動くとした。動くとした。あとは時を待つのみ。

「……期待しないでおくよ」

頼むと、背後から賈馱の声が届いた。

数日後、瀧羅は霞の部屋に突然呼び出される。出陣が迫っているのは知っていたが本人が来いというのだから、瀧羅に断る理由はなかった。夜の廊下を歩くと自然と月との出会いが思い出される。二度とこの館で月と過ごすことはないと分かっているが湧き上がって来る幻想を瀧羅は噛み潰した。

部屋の扉の前に立つと中に複数の人間の気配がする。どうやら霞は一人ではないらしい。扉を叩き来訪を報せると中から呼び込む声がしたので瀧羅は扉を開ける。

「お、やっと来おったな！」

「……こんばん、は」

中では赤い顔で盃を傾ける霞と頬を膨らませて食料を貪る恋がいた。

「ん……ねね？」

いや。まだ布団の上で紅潮した顔で寝息を立てるねねがいた。

「ねねは酔って寝てるのか？」

「……………霞に勧められて飲んだ」

「いや、たった一杯で倒れるとは思わなかったわ」

反省の色のない霞に濤羅は溜息を吐く。だがその気持ち自体は理解できるものだ。濤羅とて凶手として死地に赴いた経験は一度や二度ではない。

「……………俺も貰おう」

そう言って席に着いた。笑顔を咲かせて霞が用意してあった盃に酌をする。なみなみと注がれた酒を濤羅は一息で飲みほした。

「良い酒だ」

「せやろ？ うちの秘蔵の一品や」

笑いながら霞が自分の盃を突きだしてくるので濤羅は酒を注ぎ返した。楽しそうにそれに口を付ける様子を見ながら濤羅も手酌で二杯目を呑み始める。となりで恋は酒に一切興味を示さず肉まんを頬張っていた。

「華雄は？」

「何や気付いとったんか。あいつは真直ぐやからな、さっさと一杯だけ飲んで明日に備えるって帰ったわ」

霞の返答に得心し濤羅は酒を飲み続ける。確かにこんな感傷的な儀式は華雄の肌には合わないだろう。もう少し早く着ておくべきだった後悔する。

その感情を本能で感じ取ったのだろう。恋が「食べる？」と肉まんを差し出してきた。言葉が口に詰め込み過ぎた食べ物で不明瞭になっただけなのは恋ならではの愛嬌だろう。苦笑いを浮かべながらも濤羅は受け取った肉まんをかじった。

「最近体の調子はどうや？」

「……まあ、それなりだ」

「それなりか……」

お互いに他人事を語るかのような濤羅と霞は酒を飲む手を休めることはない。二人の速さには確かな差はあれど喉に流し込む作業を止めるつもりはなかった。

そこからは終始無言。だれも一言も語らずただ黙々と目の前の酒や料理の処理に勤しんだ。

この場に置いて言葉など何よりも形のない無意味なものだった。全員が今この瞬間を忘れることがないよう体に、記憶に、魂に刻みこんでいく。

「……もう空や」

「……そうだな」

「……こっちも」

霞の前にあつた最後の瓢箪から最後の一滴が落ち、恋の前にある皿の上も綺麗になくなっていった。

「……これでお開きやな」

その霞の言葉を切っ掛けに全員が片づけを始める。とはいってもそれ程ものが出ていた訳ではなのですぐに終わってしまった。

誰よりも先に恋が、ねねを抱えて退出していく。

「……大丈夫」

部屋を出るとき、恋は一度振り返った。

「……恋、強い。だから、負けない」

そう言つて部屋を出ていく。

恋を見送つた霞が小さく噴出した。

「……くく、全く恋の言う通りやな」

この場も恋にとつてはただの食事会程度のものだったのかもしれない。豪胆なのはたまた何も考えていないだけか。どちらにしてもこれ程たくましい者もいないだろう。そう考えるから霞も笑っているのだ。

「……これからどうすんのや？」

霞の意図が今夜のことを指しているのかそれとも別のことなのか  
濤羅には判断できなかった。だが軽い気持ちで問いかけてきたわけ  
でないことは理解できる。濤羅はできる限りの誠意を持って答えた。  
「……………分からない」

そうか、とだけ。霞はもう濤羅を見てはいなかった。

虎牢関での董卓軍敗北の報せが届くまで、日はかからなかった。

## 反董卓連合（後書き）

遅くなって申し訳ありません。そのくせ短くて申し訳ありません。それなのに他の作品とか書いていて申し訳ありません。

今回難産だったんです。といっても殆ど幕間みたいなエピソードで話の進展は少なかったですが、自分の中では大事にしたい部分でした。何といってもターニングポイントですし。

と言いつつはこのぐらいで止めておいて次回予告。

遂に虎牢関を抜け洛陽に迫る反董卓連合に董卓軍は風前の灯に。瀟羅は朝廷に伝わる伝説に従い、巨像の手に灯された炎の中に死を覚悟して飛び込んだ。だが、伝説は真実だった！ 炎を通り巨像の中に隠された巨大ロボットと反董卓連合軍の戦いが始まる。今こそ目覚めた伝説の巨大ロボットと反董卓連合軍の戦いが始まる！

次回、真・恋姫？無双 〱 鬼哭伝 〱 「崩れゆく邪悪の塔」にご期待下さい。

最後に、ここまで読んで下さった方に感謝を。

感想批評、常時お待ちしております。てか、下さいお願い……。

心にハーモニー、響かせよう

十常侍・巻（前書き）

次話投稿。そろそろ濤羅最強話が出始めるかな……。。



## 十常侍・巻

屋敷の中が騒がしくなった。誰も彼もが慌ただしく動き回り喧騒を生み出している。

無理もない。洛陽に迫る反董卓軍との戦争は既に消化試合の段階に入っている。それこそ奇跡でも起こらない限り逆転は不可能だ。最もこちらに優位なはずの虎牢関で敗北した以上、勝機はないと考えるのが道理。

それは一般の兵達にも言える。兵役を課せられただけの者達の浮足立ち方は想像に難くない。各隊の隊長達は士気を鼓舞し逃亡を阻止することで精一杯。加えて華雄、張遼、呂布、陳宮と董卓軍の骨子たる将達は虎牢関での敗北以降消息不明だ。指揮官の質も自然と劣化してしまう。

結果、誰もが直接賈馱の指示を仰ぎたがり、賈馱の常駐する屋敷では連日慌ただしい人の出入りが見られるようになったのだ。

それを分かっているながらも瀧羅には手伝えることがなかった。元より幼少より剣に傾倒し青雲幫の凶手となるべく生きて来た瀧羅に政務や軍事などの助力ができるとは思えないし、賈馱もそれを期待してはいないだろう。

瀧羅は今、瀧羅にしかできない事に全力を注いでいる。月を助けるために。

部屋で瞑想に耽る。全ての喧騒を聞き流して瀧羅はただ気を待つ。それが遠くない事を知るが故に。

その時喧騒に紛れて、明らかに今いる自室を目的とした足音を瀧羅は聞きわけた。廊下を駆けるその足取りにはただの歓談を目的としているような落ち着きはない。足音は瀧羅の部屋の前で止まり、失礼しますという男の声が扉越しに部屋へ入ってきた。短く入室を許可する言葉を掛けると扉が開き、息を切らせた兵士が一人緊張しながら入室してくる。

彼は賈馱の許可を得て借りていた董卓軍の兵士である。他にも数人いるがとりあえず隊長としてこの男を任命していたのだ。

濤羅が彼らに与えた任務は唯一つ。洛陽の街の監視である。

男は急いで呼吸を整えると、慇懃な態度で濤羅に報告をした。

「十常侍の手の者と思われる兵士が洛陽で略奪を始めました！」  
来たか！

濤羅は内心で賭けに勝ったことを神に感謝した。計画の第一段階ではあるがここまでは順調に進んでいることに安堵する。

男を下がらせると、濤羅も続いて部屋を後にし賈馱の部屋を目指した。これからの事を伝えるために。

そう。史実通りの虎牢関における敗北。その結果がやはり史実通りに起こったのだ。否、賈馱の尽力により遅くなったという方が正しいのかもしれない。

濤羅の知る歴史においては、この段階で『董卓』は遷都を終え、都を長安とし洛陽で反董卓連合を迎え撃っているはずである。そこには確実に賈馱の尽力があった。自分達の身に危険が迫って十常侍が暴走することを恐れた賈馱は、上手く情報を操作し朝廷に危機感が生まれないように工作していたのだ。尤も、そのために濤羅の計画が繰り下げられたのであるが……。

だが、最後の砦といって過言ではない虎牢関を抜けられた以上、流石の十常侍でも現状を理解し始めてしまったのだろう。大慌てで安全な場所へ、長安への逃亡を企て始めたのだ。間に合うとは思えないが今更董卓連合に戦いを挑めるよな胆力があるはずもない。逃げるという選択肢しか選びようがない連中だ。そして、月を人質にする程の強欲の塊が身一つで逃げ出すわけがなく、遷都という形で洛陽の財を奪い去ろうとし始めた。

これが濤羅の待ち望んだ好機である。今この時は、十常侍も朝廷も浮足立ち隙があるはず。月の救出を決行する千載一遇の機。それが訪れたのだ。

無論、濤羅の望んだ形とは違う歴史もあつたかもしれない。その

証拠に歴史では現段階、陳宮は呂布についていない。そんな差異に目を瞑って待っていた賭けに瀟羅は勝った。不可能が可能へと変化したのだ。

考えられる最高の手札が回って来た。今全賭け行かなければいっただというのだ。

「賈馱、入るぞ」

目的の執務室に辿り着いた瀟羅は返事を待たず扉を開け入室した。中では死にそうな顔で頭を抱える賈馱の姿がある。賈馱は許可を得ずに入って来た瀟羅を睨み文句を言おうとしたが、それを溜息に変えて怒気を拭った。

「何の用事？ 僕は超忙しいんだけど？ 超、超、超忙しいの分かっているでしょ？」

「話があつてな」

「話？」

いぶかしむ執務用の机に着いている賈馱を無視して瀟羅は椅子に腰を掛け対する。今は少しでも体力の消費を抑えたかったからだ。「十常侍が動き出したのは知っているか？」

瀟羅は徐にそう切り出した。その言葉に賈馱は眉間のしわを増やして考え込む仕草をし、ゆっくりと口を開く。

「遷都をしようとしてるってやつ？」

「そうだ」

深く頷く瀟羅。

「遷都、等というのが表向きの理由でしかないのは分かっているだろっ？」

「……臆病風に吹かれた馬鹿達が人の金まで持って逃げだそうってことですよ」

無然とした表情で賈馱は答えた。抑えきれない怒りを仕方なく噛み殺しているのが見え見えなのだが、その行き場がないのも理解できる。瀟羅は気にしないようにする。

「そうだ。今頃宮中は右に左にの大騒ぎだろうな」

「だからそれがどう　まさかあんだ！」

「ああ……………」

　瀧羅は深い息を吸い、腹案をととう吐き出した。

「宮中に侵入し、十常侍を捕える。標的は張讓、もしくは趙忠。この二人のどちらかを抑えれば、月を助け出せる」

「あんだ……………こうなるのが分かったの……………」

　こちらを伺う賈馱の視線は、この地に来た当初に散々向けられたものだった。月が捕えられてからはそんな事を考えている暇がなかったのだろうが、突拍子もない瀧羅の言葉に再び怪しむ心が蘇ったらしい。

　賈馱の問いに、瀧羅は頷いた。

「可能性は十分にあると思っていた。そしてその可能性に賭けた。なら俺は勝ち分を受け取りに行くのが当然だろう」

「あそこの警備がどれ程の物だと思ってるの！　そんな可能性の低いことに月の命を預けられる訳ないでしょ！」

　身を乗り出し胸倉を掴む賈馱の射るような視線を瀧羅は正面から受け止める。ここで退くことはできない理由があった。月光の下での月との誓い、命懸けの戦を利用した者への贖罪、そしてなにより、今この目の前で苦しむ少女は瀧羅にしか救えないのだ。

「だがそれでも、これ以上の好機があり得るのか？　それとも今を逃してありもしない未来を夢想するか？」

「……………」

　賈馱が黙り込む。しかし睨みつける瞳だけは一切揺れることなく瀧羅の目を見つめていた。

　想像するしかないが、今の賈馱の脳内ではあらゆる可能性が瞬間的に仮想され否定されるという作業が行われているのだと瀧羅は思う。この少女が瀧羅に心を許すということがあるのかは分からないが、お互いにある程度理解はできている。その程度の時間を過ごしただという自負が瀧羅にもあった。

「本当に、大丈夫なんでしょうね……………」

返答次第ではこの場で斬り殺しかねない気迫を込めて、賈馱は質問を投げかける。

「事前の情報は殆どない。正直に言えば出たところ勝負になる。だがそれでも俺は止めるつもりはない」

「その結果、月にもしものことがあつたらどうするの？」

「好きにすれば良い。逃げるつもりはない」

その全ての殺気を受け流して濤羅が答えると、賈馱は未だ納得いかぬという顔のままだが一応手を離れた。問答は無意味と判断したのか濤羅の行動に消極的理解を示したのかは判断できなかったが、少なくともこの場において力尽くで押さえつけられることだけはなさそうに濤羅は密かに安堵する。

だがそれは単純に、濤羅も賈馱を振り切って計画の強行をしなくていいという事に過ぎない。濤羅の中では既に実行は確定されており、賈馱のこれはただの決意表明と宣言でしかないのだから。

「……行ってくる」

濤羅はそう声をかけると背中を向けた。賈馱の表情は見えないが、何か口を開こうとする気配を感じ取り、濤羅は何も言わずにその場に佇む。

月以外には決して、いや月すら迫られなければ本心を隠し通そうとする少女と濤羅の距離は、思えば常にこんな風だった。近いのか遠いのかさえ分からない、それなのに相手の事を常に感じ取ることができる、そんな距離。お互いが歩み寄るでも手を取り合うでもなく、ただ自然とそこに在っただけの二人は、今この場に至って未だ、感情を封印し理性での行動のみを是としていた。

お互いに思索するのは月を如何に救い出すか。その為に賈馱は洛陽の民を、濤羅は霞や恋を。目的を達するべく他を切り捨てるという選択を選んだ二人。そこに『自分自身』を含んでいるのもまた同じだった。

そういう意味で似た者同士であると濤羅は思い至る。違いがあるとなれば、歴史知り未来を持たない者と、歴史を知らず未来を持つ

者の差。瀧羅は賈馱の未来が明るいものであることを願わずにはいられなかった。

「体はもつの？」

そこにあるのは月を救出できるかどうか。賈馱の行動原理の根底は常に月の為にある。この言葉でさえ、瀧羅が月を救う前に倒れる可能性を最も憂慮してのもの。

「もつさ」

瀧羅は断言する。それ以外の解答などあるはずもないし、あつてはならない。そうでなければ月を救い出すなど夢のまた夢、止まるはその命が尽きるときのみ、すでに決意や覚悟ではなく自然の理として瀧羅は認識していた。

その決意を賈馱も感じ取ったようで、目に諦観の念を浮かべて溜息を吐き元の席に戻ると静かに黙考を始めた。もう賈馱が何をしても変わらない段階まで話は進んでいるのだが、それで少しでも納得がいくのならば時間の許す限りそうさせようと瀧羅も目を閉じる。

だがそれも長くは続かない、二人に残された時間の少なさ故に。

「兵は動かせないからね」

「むしろ邪魔だ」

賈馱の念押しを瀧羅は切って捨てた。迅速かつ隠密性の高い策に唯の兵士 いや、良く訓練された諜報戦に長ける兵士であってもその能力は瀧羅には遠く及ばない。

その言葉を皮切りに瀧羅は席を立ち外へと向かい歩き出す。機を逃さぬように迅速こそ今最も必要とされることなのだから。賈馱と話をしていた時間すら本体であれば余分と断じられてもおかしくない。それでもここまで居たのは瀧羅の感傷でしかなかった。

「待って！」

面に出る直前に賈馱が声を張り上げた。怒りでも焦りでもない聞かせたことのない声音に、瀧羅は思わず扉に手を掛けたまま立ち止まってしまった。

「あんたはどうして、月の為にそこまでするの？」

考えてみれば当然のことだった。死にかけたところを拾われたとはいえ、出会った直後の人間に忠心を捧げ、形勢が不利になった今になってなお命を賭けて月を救おうとしている者を理解しきれないのだろう。無理もないことである。濤羅ですら霞や恋はもう洛陽に戻ってはこないであろうと考えている。臣下といえど沈みゆく船に同情し続ける謂われはない。

だが濤羅には月を救う理由があった。賈馱の厚い忠義に比べてしまえば吹けば飛ぶような小さな訳かもしれないが、それでも濤羅にとって命を賭けても有り余る価値のある理由だった。

「妹に似ていた」

振り返ることなく濤羅はそう答える。

「あなたに妹が？」

「意外か？」

「暗い兄貴ね」

軽口に苦笑いを浮かべる濤羅の脳裏には在りし日の妹との生活風景が流れていた。桃園で笑い琴を奏でる妹、約束を破られて頬を膨らませる妹、仕事に行く濤羅を涙をためて見送る妹。

「幸せにしてやりたかった。大切に守って、不幸に触れることのないように……」

賈馱が息を飲む気配を感じ取れたのは、それが予想の範囲内だったからに他ならない。

「だがそれが逆にあいつを追い詰めてしまった。あいつは守られること等望んではいなかったんだ。必要だったのは共に歩むこと、それだけだった」

話しているうちに気付いていく。相手を思うあまり相手のことが見えなくなる、月と賈馱の関係に近かった濤羅と妹。それを賈馱の視点からしたとき、どのような思いがその胸に去来するのかが濤羅には分からないが唯一つ確信的な共感があった。

二人は、こんなところまで似ていたのだ。

「同じ結末は見たくない。俺が月に命を賭ける理由はそれだけだ」

「……………月は、あんたの妹じゃない」

呻く賈馱の言葉は精一杯の否定を込めたもの、逆に言えば無意識下では否応なく肯定してしまっている。

「そうだな」

濤羅はその答えを賈馱に返すと止まっていた体を再び動かし扉を開け退出の為の一步を踏み出すと、今まで室内にいた反動が強すぎる太陽の光が身に染みた。これが日常になってしまっていたことに濤羅は初めて気付く。日光を振り切って濤羅は足早にその場を後にした。既に一瞬にして濤羅の感覚から自然は消え去り、精神が汚染されあらゆる生物に牙を剥く自然とは対極の上海へと舞い戻る。

ここにいるのは『孔濤羅』、人呼んで『紫電掌』



## 十常侍・巻（後書き）

お久しぶりです。第七話の一を投稿しました。

最近の本編と同様に後書の嘘次回予告をどうするかに苦心するようになってきました。読んでない方には邪魔な長文で、特に携帯で読むと非常に余計な様な気もするのですが、折角なのでこのまま続けていこうかなと思います。

ちなみに最後の一言の元ネタを全て分かった人はいるのでしょうか？

という訳で次回予告。

こんにちは、孔濤羅です。俺の友達に内家拳法極めただけじゃ飽き足らず、最強の人間を超えた力を手に入れようと全身を人体と全く同じサイボーグにした奴がいるんだ。血管から内蔵まで全部だぜ？ いや、この根性、董卓軍だねえ。さて次回の恋姫無双、鬼哭伝は『風雲竜虎編死闘始まる・濤羅VS十常侍』。そこんとこ、よろしく。

最後に、ここまで読んで下さった方々に無上の感謝を。お気に入り登録を下さった方々に愛を。

感想・批判・批評は随時お受けしています。忌憚ないご意見をお待ちしております。

君んちにも宇宙人、いる？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8214r/>

---

真・恋姫?無双 ~ 鬼哭伝 ~

2011年10月1日02時44分発行